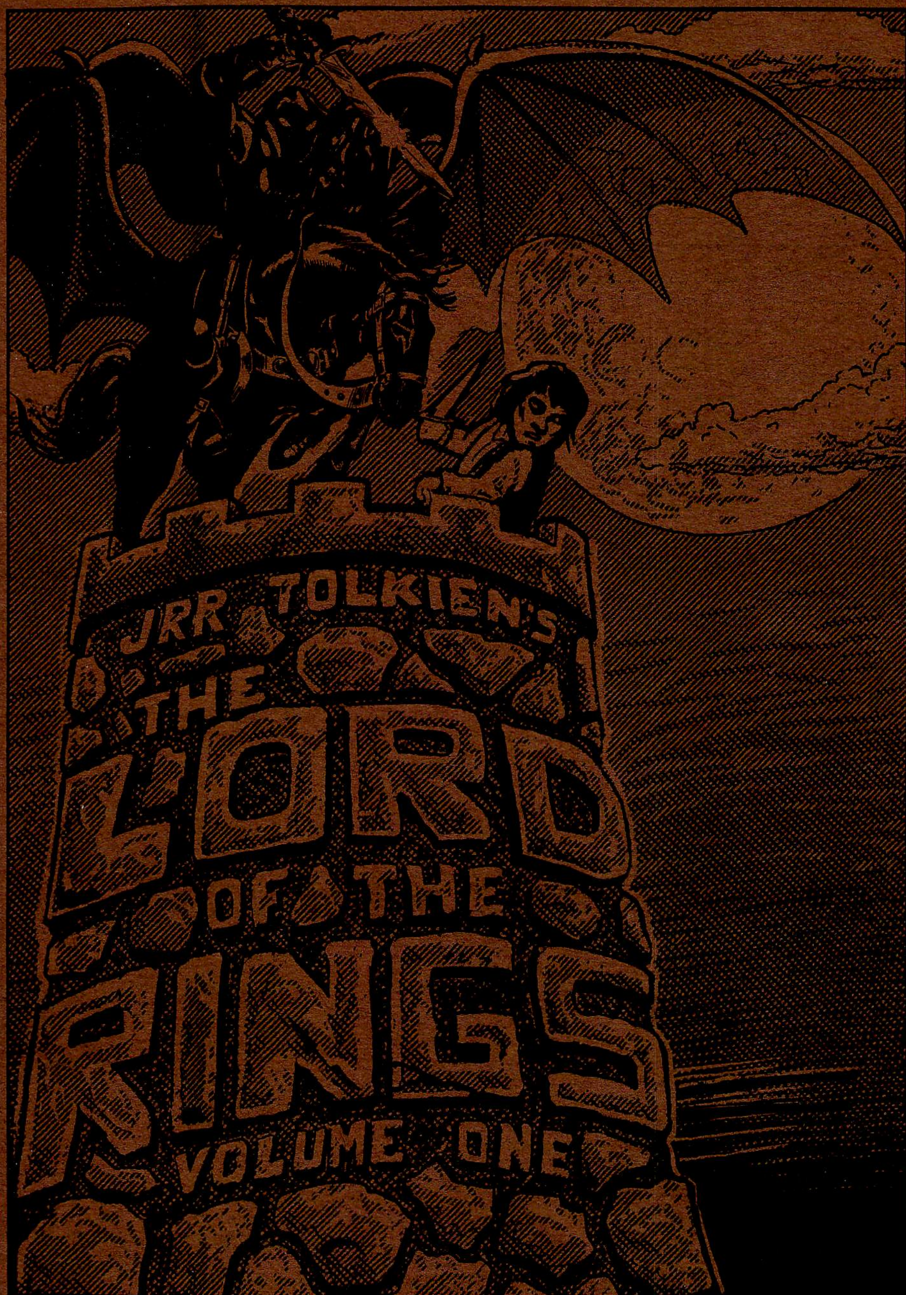
パラグラフ・ブック

# 指輪物語

## 第一巻 旅の仲間




JRR TOLKIEN'S
THE
LORD
OF THE
RINGS
VOLUME ONE

**1.**

「パランティアだ！」ときみは叫んだ。これらの伝説の『見る石』の一つが、この時代ずっとここホビット庄にあったことを考えてきみは笑った。きみは恐る恐る、その水晶のような表面から丁寧にほこりを拭き取った。拭いているうちに、パランティアの内部にほのかにバラ色の光が宿り始め、それから、うっすらと赤色を帯びた暗い人物の姿が映し出された。その人物は陶製のスツールに腰掛けて巻物を読んでいた。

突然、闇の帝王が悪意でぎらぎら輝く燃えるような赤い片目を上げて、「シューシューシュー」と唸った。「指示されていないパラグラフを読むんじゃない。お前たちが気に入るおあつらえ向きの場所が、モルドールにはあるぞ！」

そういうと、その幻影は消えた。だが、消えていきながらも、つぶやく声が聞こえてきた。「ダーク・ロードが秘密を教えてくれると思っているだろうが、それは否だ！」

**2.**

どうやら、ここを通過するには、ある種の答えが必要らしい。

**3.**

ふたたび、エルロンドの澄んだ威厳のある声が会議場に響き渡った。「今までの話しから唯一引き出せる結論は…敵が再びミドル・アースを動き回っているということだ。かの者は一つの指輪をしきりに探し求めており、エルフの三つの指輪の力が強いとはいえ、それだけでは広がってくる邪悪の影に長く抗しきれるものではない。われわれは指輪をここに留めおくことはできぬし、ロスロリエンやいずれのドワーフの砦に隠したところで、いつまでも無事ではあるまい。海に投げ込んだところで当てにはできぬ。結局、指輪は破壊されねばならないのだ。」

エルロンドの刺すようなまなざしが指輪所持者に向けられた。「わたしはこの荷をあなたに強いて負わせることはできぬ。だが、あなた以上にふさわしい人物がいないことも知っている。指輪を持って滅びの山へ旅立ち、その火の中に指輪を投げ込んではもらえまいか？」

**4.**

フレディはクモから解放されたものの、ひどい傷を負った。かれは必死に涙をこらえながら、自分を家に帰してくれる人たちに会えて、とても喜んでいる。かれはきみたちの一行に加わった。

そばにいくつかのアイテムが散らばっていた。死んで焼き豚のようにくくられたドワーフの骨、古い斧、星形のカギなどがあり、そのドワーフの手には、読みやすいドワーフのルーン文字で書かれた巻物が握られていた。その巻物は読めそうだ。

**5.**

通路は広くなって、暗い部屋に通じていた。部屋の中央に大きな円形の穴があり、その穴の暗がりの中に錆び付いた鎖がぶら下がっていた。おそらく、昔の大井戸として使われていたものだろう。アーチ付きの通路が3本東に延びている。左側のアーチは深く傾斜している。真ん中のアーチは平坦なコースに延び、右側のアーチはいくぶん高い場所へ上りになっている。

**6.**

エレストルは一息ついて、言葉を選んでから続けた。「デュリンの一族が初めて霧ふり山脈の下に住み着いた時、かれらの中で最も腕の優れた職人が並外れた力を持つ武器を造った。ドワーフたちは父祖の名にちなんでそれを『デュリンの斧』と名付け、カザド＝デュム、すなわちモリアの深淵から危険な闇の生物を一掃した。モリアの滅亡にともなって、この武器はデュリンの民の話題にのぼらなくなった。しかし、この斧は見い出され、今ではモリアの鉱山のどこか深くにあるオーク鬼の宝庫で眠っているという者もいる。」

**7.**

霊魂のいったとおりだ。確かに暖炉の上に秘密の飾り棚がある！

**8.**

丹念に書かれた巻物をきみは読んだ。「暗黒のき裂、モリア、ドワーフ語でいうところのカザド＝デュムは、霧ふり山脈の地下深くにあるドワーフの大都市だった。その西の門に面しているのは失われたエレギオンで、またの名をホリンという。東の門を通ると、おぼろ谷とロスロリエンの黄金の森に出られる。大きな階段がはるか山頂まで達し、さらに、恐ろしい地下の秘密へと深く掘られている。それはまさにミドル・アースに並ぶもののない驚異の一つであり、恐怖と死の場所でもある。現在そこに住むドワーフは一人もいない。卑劣な、暗闇を好む生き物だけが住みついている。」

**9.**

はなれ山に住むドワーフの代表者が発言した。「闇の王の使者が、はなれ山のわが国にやってきて、サウロンのご執心のほんのささやかな品、取るにたらない指輪がどこにあるか教えろといいました。われらは何ヵ月もそやつを無視しております。しかし、われらはこの指輪のことと、邪悪なる者がどうしてその指輪をそれほどに欲しているのか知らねばなりません。そこで、あなた方の賢人会議を求めて、わたしがつかわされたのです。一方、谷間の国の者たちを含む別の一行が、ロスロリエンの奥方のところへ使者として参っております。」

**10.**

ささやく声が聞こえた。「ナインのケルンから。東．北．東．東．北．東」

**11.**

羊皮紙にこう書かれていた。「魔王の勢力の到来が確かなものとなったとき、アルセダイン王アルヴェレグⅠ世は、いちばん下の息子アモナールに、『折れたる剣』の破片を2つ与えて、暗い森の東にあるカルドラン歴代の王の塚に隠させた。そして、3つ目の破片は、自分でアモン・スールの要塞の奥に隠した。」

**12.**

眠っている人物のそばの赤茶けた岩壁にぶら下がっている錆びた鍵輪が、きみの松明の明かりでかすかに光った。目ざとくなかったら、ここにぶら下がっているのを見過ごしていただろう。

**13.**
「この錆び付いた剣は、わしが愚かな若造にすぎん時分に、この南にある塚の中で見つけたものだ。これは往古歴々の王たちから伝わる古い魔法の品の一つであると、老治療者ラッシュドックが教えてくれた。きみたちの旅に役立つかもしれん。」

**14.**
「どうぞごゆっくりお泊まりくだせえまし！ノブがお客様がたのお部屋を用意いたします。居間には火がごぜえますし、すぐ食事の用意をしますで。」
「おーい！ノブ！」かれはどなった。「どこにいる、もじゃもじゃ足ののろまやーい?」
それから振り向いていった。「小馬がありなさるなら、ボブによく世話をさせますで。」

**15.**
年寄りだが、いまだにその名にぴったりの赤鼻の頑丈な男が、カウンターのうしろの大きな石の重しを持ち上げている。壁には、激しい肉体活動の様々な形態を表している人間とホビットの奇妙な絵が描かれている。

**16.**
自分の穴をこんな有り様にして放っておくホビットなんかいない。粉々に壊れた家具、割れた瀬戸物、破れた本、しわくちゃの衣類が部屋のあちこちに散乱していた。この様子から判断して、ホビットが住んでいたとは思えない。

**17.**
羊皮紙にこう書かれていた。「魔王の勢力の接近が確かなものとなったとき、アルセダイン王アルヴェレグⅠ世は、いちばん下の息子アモナールに、『折れたる剣』の破片を2つ与えて、エルフの保護下にある灰色港に近い西の橋の下に隠させた。3つ目の破片は、自分でアモン・スールの要塞の奥に隠した。」

**18.**
もの悲しい廃墟がぽつねんと立っている。この廃墟は昔ドワーフたちが建てたものだ。ドワーフの作品にありがちなことだが、かれら自身は虐殺されてしまったのに建物だけは持ち堪えたのである。

**19.**
広いアーチの上に、太った白い小馬が後肢で立っている大きな看板が風に揺れていた。ドアには白い字で、「躍る小馬亭、バーリマン・バタバーの宿」と書いてあった。中のどこかから、愉快な歌が始まり、たくさんの楽しそうな声がそれに加わって、にぎやかな合唱になった。

**20.**
一目見ただけでぎょっとするような、グロテスクな影物がドアの周りに施されていた。しかも、これらの擦り切れた石を彫ったのはオーク鬼ではない。もっと凶悪で邪悪な何かが、これらの装飾物を造ったのだ。

**21.**
『きみたちが探し求めているものは、見限り宿で探せ。』

**22.**
羊皮紙にこう書かれていた。「魔王の勢力の接近が確かなものとなったとき、アルセダイン王アルヴェレグI世は、いちばん下の息子アモナールに、『折れたる剣』の破片を2つ与えて、イムラドリスのエルフの保護地区の近くにある霧ふり山脈の洞窟の中に隠させた。3つ目の破片は、自分でアモン・スールの要塞の奥に隠した。」

**23.**
きみたちが独房に近づくと、どんよりした目つきの、茶色のもじゃもじゃ頭の、あご髭を生やした筋張った小男が、鉄棒の前に躍り出た。「あんたたち、やつらの仲間じゃねえな。」と、べちゃくちゃしゃべり始めた。「わかるぜ、おいらには。おいら、アップルドアってんだ。小谷村で骨董品売ってたんだよ。ファーニーのやつがいったのさ、最高の品をここに持ってこいってさ。やつらが大金を払うだろうってね。あんたたち、ここの秘密を探りにきたのかい? オーク鬼のやつら、洞窟の中で秘密のものを掘ってるとこだ。そこにゃ、たまげた値打ちもんがあるんだ。オーク鬼のやつらには、それがわかるのさ。」
「やつらは、グリムボシュの黒表紙本を読んで、そのことを全部知ってるんだ。その本にゃ、秘密が書いてあるんだ。ほんとだぜ。」男はまくしたてている。男は鉄棒に顔を押しつけて、目をぎょろつかせながら囁いた。「もちろん、あんたたちがおいらを自由にしてくれたら、その秘密をみせてやれるんだけどよ。」



**24.**
「よそから来た大きな人が、わしにバギンズ氏のことをたずねた。わしはそいつに、とっとと帰らんと犬をしかけるぞといってやった。すると、そいつはしゅっしゅっというような音を出した。あれは笑う声だったかもしれん。それから、やつはわしめがけて、その大きな馬に拍車を入れおった。わしはすんでのところで飛びのいた。そのあと小道でせがれを見つけたんだが、せがれにいったい何が起こったものやら。治療師を呼びに行くつもりだったが、せがれを残して行くのもなあ。そこであんた方、村まで行って治療師を連れ来てくれんかね? そう遠くはないし、わしはとても心配なんだ。せがれはまだ目を覚ましていないのだよ。」

**25.**
目を前後にすばやく投げかけて、部屋の暗い隅を一つ一つじっと見入りながら、かれはささやいた。「『黒い亀裂』に入るには、二つの合い言葉が必要だ。」

**26.**
何か目に見えないものによって床に投げかけられた、影のようなエルフ文字がきみたちを取り囲んだ。

27.
長身で日焼けした野伏は椅子にすわったままだったが、かれの力強く澄んだ声は会議室じゅうに響き渡った。かれは、テーブルの上の二つに折れた剣に目をやりながらいった。「ここに『折れたる剣』がある。デュネダインの王国ゴンドールとアルノールの創設者、エレンディルの家宝だ。わたしはアラゴルン。北方における野伏の首領であり、イシルデュアから幾世代も数えたエレンディルの後裔となる。何年もの間、わたしはガンダルフの指輪探しを手伝い、そしてゴクリを捕らえた。この狂った哀れな生き物から、ビルボは指輪を手に入れたのだ。われわれはゴクリから、イシルデュアの死後の暗黒時代からビルボの謎々遊びまでに至る、指輪にまつわる多くのことを聞き出した。その指輪こそ、『イシルデュアの禍い』であり、イシルデュアが敵の指から切り取ったものである。ここにわたしは、指輪所持者を守り、案内をつとめると心に決めた。指輪所持者が誰であれ、わたしの同道を望むなら、どの道を選ぼうとこの決心は変らない。だが、この任務をなし遂げるには、『折れたる剣』の失われた刃を発見し、ナルシルを鍛え直さねばならない。」

28.
奈落の底から、煙と硫黄の悪臭に満ちた大量の熱風が湧き立っている。と同時に、肩から重荷が取れたように、緊張がほぐれていくような気がした。

29.
ミドル・アースで最大の力を持つのが、真っ白な秘密の炎だ。このアノールの炎こそが聖霊エアで、イルーヴァタールの創世の思念に生命を吹き込んでいるのだ。アノールの金の舵輪はイルーヴァタールの力の証であり、エルフがこの世に現れる以前の戦いでモルゴスに破壊された、ヴァラールの灯火の破片で鍛えられ、アウレによってドワーフの父祖デュリンに贈られたものである。モリアが闇の手に陥った時、舵輪も失われたと伝えられている。さらに、金色の円盤が、人間たちによって風見が丘の西方の地に持ち込まれたという噂もある。舵輪の真の目的は今はもう知られていないが、おそらく秘密の炎の象徴にしようとしただけなのだろう。

30.
きみたちの戦闘能力のあまりの凄さに、敵の残党はうろたえた。数分後、敵が突撃してきた時、ロリエンの軍勢が到着した。オーク鬼たちは川に放り込まれ、ドル・グルデュアに戻ったものは一匹もいなかった。

31.
「ダーロ！」命ずるようなエルフの声が旅の仲間に呼びかけた。「そのままじっとして！　動いてもいけない、しゃべってもだめ！」　木立の暗がりからはしごが一つ下ろされてきた。「この暗黒時代には、合言葉が必要です。」とエルフの隊長がいった。

32.
「グロンド」

**33.**

この深い緑の窪地には、丘の上の噴水から流れ出した水が銀色の小川になってさらさらと流れていた。窪地の底には、低い台石の上に大きくて浅い銀の水盤がのっていた。そしてその横には銀の水差しがおかれていた。

**34.**

閉ざされた門に怯むな。唱えよ、友、そして入れ。

**35.**

「ホビット！」とバタバー氏が叫んだ。「さあて、これで思い出すことはと？　で、お名前を『山の下』とおっしゃえましたっけ？　山の下？　その名前で何か思い出さなきゃなんなかったんだけんど、このとおり、次から次へと忙しくて。したども、考えるひませえあれば、また思いつくべえ。ノブがお客様がたのお部屋を用意いたします。居間には火がごぜえますし、すぐ食事の用意もしますで。」
「おーい！　ノブ！」かれはどなった。「どこにいる、もじゃもじゃ足ののろまやーい？」
それから、振り向いていった。「小馬がありなさるなら、ボブによく世話をさせますで。」

**36.**

旅の仲間にのろのろと追いついたギムリを見てレゴラスがいった。「ドワーフの足がもっと長かったら、待つ必要もなかったでしょうよ。」「エルフがもっと辛抱強かったら。」と、ギムリが答えていった。「ぶつぶつ言わないで待っていてくれたでしょうな。」「やめろ！」ガンダルフが声高にたしなめた。「陳腐でうんざりする口論じゃ。わしらに関わることで大いに興味深い事があるじゃろうが。」

**37.**

エルロンドは、年輪で研ぎ澄まされた鋭い目で、旅の仲間を交互に値踏みしながら評議会を見渡した。「サウロンは、またの名をアンナタール、或いはアウレンディル、アルタノ、敵、忌むべき者、或いは人狼の長として知られているが、彼自身かつてはモルゴスの僕であった。モルゴスは、またの名をメルコールとも、バウグリアとも、或いは冥王とも呼ばれ、ドルーエダインには大いなる闇の者とも呼ばれている。一方、アンナタールとも呼ばれるサウロンもやはり、ゴンドールでは闇の者として知られている。アマンディルの息子であり、アナリオンとイシルデュアの父であるエレンディルは二つの王国を築いたが、ゴンドールはそのうち南側に位置する方にあたる。サウロンは、黒の国モルドールに暗黒の塔バラド＝デュアを建てた。モルドールではスナガとウルク＝ハイで構成されるオーク鬼（ゴブリンとしても知られる）どもが精力的に働いていた。アラソルンの息子アラゴルンが、あなた方にモルドールのことを話してくれよう。アラゴルンはまたの名をエルフの石エレッサール、或いはテルコンタール家の馳夫、或いはエステル、或いはソロンギル（星の鷲）という。」　フロドはこっそりと横のドアから抜け出した。

**38.**
ホールが突然騒々しくなった。古代秘密会議の騒音だ。あたり一面戦いの騒音だ。それから、しんと静まりかえって、一本の血塗られた斧だけが足許の床に残された。

**39.**
馳夫が突然振り向いた。目は血のように赤く輝き、歯は短い短剣のように鋭い。きみたちは恐怖に立ちすくんだ。かれは野伏ではなかった。かつて二つの時代に渡って、ミドル・アースでは見られることのなかった種族…吸血鬼だった！
「ばかもの！　わしが他の理由でお前たちを夜の街にうろつかせると思うのか、夜はわしの時間なのだ。」　かれはきみたちに向かってしゅっしゅっと唸った。
「わが主人サウロン様は、われらのことをお忘れになっていなかった。われらは少数だが、貴重な存在なのだ。サウロン様が求めておられるのは指輪だけだ。指輪を渡せ、そうすれば仲間の血を吸うだけにして、お前は見逃してやるぞ。どうする?お前次第だ。」　きみは仲間を裏切って吸血鬼に一つの指輪を渡すか?

**40.**
タフィは笑顔を作ろうと努めながら、一緒に行くといった。友達のフレディ・グラブがほら穴に落ちて怪我をしたというのである。彼女はきみたちに、狼たちを追い払って、それから友達を見つけて欲しいと頼んだ。

**41.**
ここは、ガラドリエルとケレボルンのフレトに通じる入口だ。きみたちは行く手を遮られた。「5つのアイテムを持って来るまで、奥方にはお会いできません。そのアイテムとは、銀の角笛、魔法のさや、エラノールの王冠、エルフの石、エアレンディルの星の光です。」

**42.**

今まで沈黙を守っていたガンダルフが立ち上がり、息をついて、慎重に言葉を選びながらいった。「指輪所持者が追跡された話を聞き、それだけで、この小さい人の指輪が敵にとって非常に値打ちのある品物である証拠になると考える方もおありじゃろう。わしはずっと、ビルボの見つけた指輪は、サウロンがしきりに欲しがっている一つの指輪にちがいないとにらんでおった。じゃがこの夏まで、真の全貌もわしらに迫る危険の性質も知らなかった。なぜなら、わしらの敵はサウロンだけではなかったのじゃ。

白の会議の議長であり、魔法使いの中で最も偉大な白の賢者サルーマンは、何年も前から指輪の秘密を探求し、この課題を自分の研究分野とした。そのため、この分野に干渉する者を快く思っていなかったのじゃ。結局、かれは、指輪はアンデュインの川を流れて海に運ばれ、永遠に海の中に埋もれるであろうという見解を述べた。わしはずっとかれの言葉を信じておった。

「6月にわしは、わが賢人団の一人、茶色の賢者ラダガストから、9人の僕ナズグルが国外に出て、『ホビット庄』と呼ばれる土地とバギンズの名前のホビットを捜していると聞いた。わしは直ちにサルーマンの援助を求めに馬を走らせた。というのも、わしらがドル・グルデュアからサウロンを追い出し、闇の森から悪を取り除くことができたのも、サルーマンの力があったからじゃ。なんたる過ち！これほどの手ちがいはなかったのじゃ！

「サルーマンはわしを出迎えてあざけり、自分を多彩なる魔法使いと呼んだ。かれは指輪がどこにあるか教えろといい、自分の味方につくなら、大きな力を約束しようといった。わしは断った。そして、サルーマンの本拠である高い塔、オルサンクのてっぺんに閉じ込められたのじゃ。大鷲のグワイヒアが助けてくれなかったら、わしはいまだにそこにいたじゃろう。

「サルーマンは敵となってしまった。たとえ裂け谷が敵に対して長く持ち堪えているにせよ、ここに指輪を長く隠しておくことはできぬし、海に投げ捨てたところで、失われたままですむと信じ込むことなどできぬ。したがって、指輪は破壊せねばならぬ。指輪が作られた場所、モルドールにある滅びの山の火口に投げ込まねばならぬのじゃ。」

**43.**

哀れに折れた牙のように、丘の頂上に環状に立っている荒石造りの柱の間を吹き抜ける冷たい風が、不気味にヒューヒューうなっていた。その環のほぼ中央には、荒石があちこちに転がって、ぞんざいな目印を形作っていた。おそらく、昔、誰かがあとで戻るつもりでここに何かを残したのだろう。ビルボがトロウルから奪った戦利品を石塚の下に埋めた所とよく似ている。

**44.**

炉を繰り返し打ち続けるハンマーの音が聞こえる。しばらくすると、肩幅の広いエルフがきみたちを見てにこっと笑ってた。「わたしはクルドル。偉大なケレブリムボールの弟子です。何かお手伝いできることがありますか?」

**45.**

7つのハンマーの扉で、父祖の名を告げてから、彼らの数をいえ。

**46.**
「アーチェト村で探し求めているものを探せ。」

**47.**
その部屋は、手入れの行き届いていないホビット穴を思い出させた。かつて、ここの家具にはとても家庭的な雰囲気があったことだろう。しかし、手入れもせずに長いあいだ使っていたため、大半がせいぜい薪の足しにしかならないがらくたと化している。重苦しい獣皮が窓をおおって、日の光や月の光が差し込まないようにしている。地元粥村の人とは思われない長身で黒髪の男が、テーブルから立ち上がった。「どうぞ」と、その男は人なつこい笑顔を浮かべていった。「遠慮せずに、おくつろぎください。わたしの噂はもう聞いておられるはずです。バタバー爺さんにうんざりするほど聞かされているでしょうからね。しかし、あの爺さんのごちゃごちゃ頭にわたしの名前を覚える隙間があるというのは驚きだ。」
「わたしの名前はライフ・ブロガン、この者たちは、」とかれはいって、前にも見たことのある無愛想な盗賊の何人かをぐるっと手で指し示した。「粥の里の仲間で、この辺のどこを探してもいない高潔な勇者の一団です。われわれは、よそ者からわれらの小さな土地の自由を守るために戦っているのです。自分の生き物どもを南方丘陵でうろつかせている不愉快な魔法使いや、他人のことにやたらと首を突っ込んで嗅ぎまわっているおせっかいな野伏どもがいますからね。
「わたしを盗賊と呼ぶ者もいれば、追いはぎと呼ぶ者もいますが、多くの人は友と呼んでくれます。そして、わたしはあなた方と友達になりたいのです。この辺に住んでいる人たちと違って、あなた方には冒険者魂がおありのようだ。あなた方のような人が必要なんです。わたしの方も、見返りに何かして差し上げられると思いますよ。いかがかな。」　気のせいかもしれないが、急に部屋が少し暗くなったようだ。

**48.**
ほこりまみれの巻物から秘密が明かされた。「魔王の没落に続く暗黒時代に、要塞の築かれたゴルサドの村が、昔カルドランとして知られた地域の北辺を守っていた。カルドランの領民たちが、魔王をまねて黒魔術師になろうとした領主に反抗して立ち上がったと主張する者もいる。この説は、出所から派生した別の話によって信頼性を高めている。ゴルサドの領主ガルデレグは、カルン・デュムの廃墟から魔法使いの黒表紙本を持ち出し、オーク鬼たちがモリアの深淵から持ってきた金の舵輪を買い取っていたというのである。カルドランの領民たちは、領主が魔法陣の中にいるところを捕らえ、そして、魔女だと伝えられていた領主の妻をはるか北方へ追放したという。」

**49.**
「去年の夏に老ガンダルフがここへ来ました。あのガンダルフって方は本当に変なお人でございますよ。ホビット庄から来る人たちを助けてやるようにっておっしゃいました。バタバーがホビットたちをわたしの所へ寄越してくれるだろうからって。それから、ホビットたちに本名を聞けば、その人たちだとわかるだろうとも。」

**50.**
木の間から一人の男が出てきた。背が高く、顔立ちの整った人間で、旅で擦り切れては見えるものの、洗い立ての茶色い服を着ていた。男は、生まれながらずっと森の中で生活しているかのような粗野な物腰をしていたが、にもかかわらず、かなり美しい顔立ちをしていた。「ホビット庄のこんな場所をホビットたちだけでうろついているのを見るとは珍しいな。それも、こんな物騒な時代によ。このあたりはエルフが歩き回ってるもんだよ、エルフが。それと、エルフよりはるかに悪い連中もね。」
　男はきみたちの疑ぐるような表情に気づいて、深々と息をついた。「この先の道中を守ってやる必要があるね。おれなら、それができるよ。手伝ってやろう。」この男を旅の仲間に入れるか?

**51.**
老人は棚からアイテムを盗み取った。「あは！」　老人は嬉々としてべちゃべちゃしゃべった。「手伝ってくれてありがとうよ！　わしがあんた方にやるものをハム・オークビロー に持っていってくれ。あいつにはこれが至急入り用なんじゃ。あいつはそうだとはいわんじゃろうがね。」

**52.**
ささやく声が聞こえた。「オーリンのケルンから。西.西.西.南.西.北.西.北」

**53.**
この薄暗くて風通しの悪い店は、薬草と保存香辛料の臭いがする。奇怪な小さな魔除けとルーン文字の刻まれた石が棚に並び、さらに、垂木の間の掛け釘から革紐で吊るされている。店主の、女が、カウンターの向こうで深々とした椅子にけだるそうに横たわって、奇妙な彫物の施されたブライヤパイプをゆっくり引き寄せていた。

**54.**
この娘は名前をデイジー・プラウドフットという。きみたちは、彼女に何があったのか、また、震え声で懇願しているわけを訊ねた。「妹のタフィーと妹のお友達のフレディ・グラブが東の森で行方不明になってしまったんです。ああ、勇気あるお方たち、どうか狼に見つかる前に、二人を探し出してくださいませんか? タフィーは大路雑貨店へ連れていってください。フレディはあの人のお父様のところへ帰してあげてください。」

**55.**

芦の上につぶれた古帽子が現れ、帽子の下に、大きな黄色い長靴を除いて全身青ずくめの男が現れた。「いったいどうしたというのかね?」 その男が叫んだ。「わたしはトム・ボンバディル。用があったらいってくれ。トムはお急ぎなんだから!」

きみたちは何が起こったか説明した。「なんだと!」 トム・ボンバディルは跳び上がってどなった。そんなひどいことがあるもんか。それならすぐに改めさせるぞ。わたしはあいつに聞かせる歌を知ってるぞ。おい、灰色の柳じじいよ! ちゃんとおとなしくしないと、骨の髄まで凍らせるぞ。わたしが歌えば根っこがもげるぞ。わたしが歌えば風が起こり、葉っぱも枝も吹き飛ぶぞ。この柳じじい!」

トムが歌い始めた。「みんなを出してやれ、柳じいさんよ。お前は何を考えているんだ? お前は目を覚ましたらいけないぞ。土をお食べ! 深く掘れ! 水をお飲み! ボンバディルが話してるんだぞ!」

まもなく、すべてが元どおりになった。ボンバディルは、少し離れた川向こうにある自分の家にきみたちを招待し、それから姿を消した。

**56.**

秘密の炎はモリアの石の下に埋められている。清い魂の証を持つ者だけが、その光に包まれて、最後までホールを通り抜けることができる。

**57.**

「ああ!」と、年取った川の精霊が大粒の泥の涙を流しながら叫んだ。「わらわがそなたらの望みをかなえることはできません。泥の沈んだ我が川底より深い魔法が、川沿いに再び春がやって来ぬ限り、それを許してはくれぬのです。でも、一つだけ方法があります。西へ向かい、赤いオークの木を訪ねなさい。かれに赤いどんぐりを持って行って、春の石のことを尋ねるのです。」

**58.**

エレストルは一息ついて、言葉を選んでから続けた。「デュリンの一族が初めて霧ふり山脈に住み着いたころ、かれらの中で最も腕の優れた職人が並外れた力を持つ武器を造った。ドワーフたちは父祖の名にちなんで、それを『デュリンのつるはし』と名付け、ミスリルを求めてカザド=デュム、すなわちモリアの奥底を掘った。畏怖の念を感じさせるこの道具は確かに強力だったが、あまりに深く掘り過ぎたため、破滅をも引き起こしてしまったらしい。モリアの滅亡にともなって、このつるはしは、デュリンの民の話題にのぼらなくなりました。はっきりしない噂だが、そのつるはしが粥村の人々に発見されたという。」

**59.**
オーク鬼だらけのこの洞穴の中に、女性の寝室があるだなんて、誰が想像できただろう！　その部屋の飾りつけは少しも派手ではないが、きみの目と鼻は嘘をついていない。ガウンと旅着があちこちに散らかり、ふかふかの羽毛のベッドには、最近だれかが使った跡があり、香水の残り香は油断ならない陰謀を思わせて鼻をくすぐる。これと同じぐらい妙なのは、書物と巻物がさりげなく床に積んであることだ。開いたままになっている大きな本には、仲間の中で最も博識な者でさえ見たことのない文字が書いてあった。複雑な思いが全員の心の中で争っている。この女性は囚人なのか、それとも、なにか非常に邪悪な者なのか?

**60.**
立ち上がった馳夫の姿は、突然前にも増して背が高くなったように見えた。「それで、あなた方はわたしの誠実さを試したいのだな。」　そういうと、かれは旅で汚れたマントの懐に今まで隠し持っていた長い不吉な剣を抜いた。黒ずんだ炎をしたたらせて、刀身が黒くちらちら光っている。「もっと前に殺そうと思えば、殺せたのだが。」　「一つの指輪は、すべてを統べ、一つの指輪は、すべてを見つけ、一つの指輪は、すべてを捕らえて、くらやみの中につなぎとめる。影横たわるモルドールの国に。おれに指輪をよこせ。そうすれば、わが君主サウロン様は逆らった罪を許してくれるだろう。指輪だ！指輪をよこせ！」

**61.**
この川には橋がかかっていたらしいが、ずいぶん前に崩れ落ちている。

**62.**
オーク鬼たちは、ガンダルフとバルログの落ちた奈落に粗末な橋をかけた。深い奈落の下には、今はただ音も動きもない煙がうっすらと静かに漂っている。

**63.**
きみは素早くひもをほどいて、巻物を広げた。本文の行のほとんどがびっしりと黒で塗り潰されている。読めるところはまったくない。最後の数文字だけが何とか意味を読み取ることができた。「修道女」と、きょうの日付のあとに書かれていた。

**64.**
大きな暖炉の横に、非常に骨張ってごつごつしたオーク鬼が立っていた。かれの汚れた衣服は、かつてはどこかのエルフ王のものだったらしいが、今では不快な魔除けが花づなで飾られ、ぶらぶら揺れては互いにもつれ合ってじゃらじゃら鳴っている。
「ここは赤目のドリスナクの家だ。」　特徴のない明瞭な声でかれはいった。
「お前たちがそのうちここに来るって、おれは知ってたぜ。これも運命ってわけだ。おれが助けてやらないかぎり、お前たちはモリアから出られん。報酬は安いぜ。指輪を持ってるだろう。取るにたらんつまらん指輪だ。ほんのちっぽけな品物にすぎん。」
かれは言葉につまったが、またしゃべり続けた。「その指輪が欲しいんだ。そいつをくれたら、お前たちを無事にここから出してやる。」

**65.**
この古代の地下室の石壁から、幽霊のようなささやき声がやわらかく響いてきた。
「死の都に、かつて導きたる者座せり
指輪がその者の禍いなりて、塚がその神殿なり
その者は世の終わりまで待つ、
その者の過去を尋ねよ」
霊魂の声は、それ以上ミドル・アースには聞こえてこなかった。

**66.**
何か目に見えないものによって投げかけられた影のように、ドワーフのルーン文字がきみたちを取り囲んでいる。

**67.**
「8つの謎をとくと考えよ：オークとドワーフが死ぬのを魔法使いがじっと見ている。一方で、腐って乾いた骸骨を狼がガリガリかじり、自分の皿に盛られた人間をトロウルが食べ、そして、鷲が空高く舞い上がる。」

**68.**
老人は棚の上からアイテムを盗み取った。「あは！」老人は嬉々としてぺちゃぺちゃしゃべった。「わしがあんた方にやるものをウィラ・ブルームの所に持ってってくれ。あの女にはこれが至急入り用なんじゃ。彼女はそうだとはいわんだろうがな。」

**69.**
魔法使いの力強く優美な筆跡で書いてあったのは、次のようなメッセージだった。

　粥村、躍る小馬亭にて、

　ホビット紀元1418年、年の中日

　フロドどの、

　今、わしの手許に悪い知らせが届いた。わしは、すぐ出かけなければならない。あなたも早々に袋小路を立ち退き、遅くとも7月末までにはホビット庄を出て行かれるようになさるがよい。わしもできるだけ早く戻って来るつもりだ。その時すでにあなたが立たれたあとであれば、すぐあとを追いかけることにする。粥村を通られるなら、この宿にわしあての伝言を残されよ。宿の亭主(バタバー)は信用してもよろしい。旅の途中で、わしの友人の一人に会われるかも知れぬ。かれは人間で、やせていて、色浅黒く、背が高い。馳夫と呼ばれることもある。かれはわれらの一件を知っており、あなたを助けてくれるだろう。裂け谷に向かわれよ。そこでの再会を期している。わしがいなければ、エルロンドが助言してくれるものと思う。

とり急ぎ

ガンダルフ

　二伸、たとえいかなる理由があろうとも、二度と再び例のものを使わぬこと！夜の旅は避けよ！
　三伸、本物の馳夫であるかどうかを確かめること。旅の道では変な人物に出会うことが多いだろうから。かれの本名はアラゴルンという。

**70.**
静かな声でかれがささやいた。「牙の丘の頂上でトロウル殺しを探せ。」

## 71.

独房に近づくと、虚ろな目をした、もじゃもじゃ髪の、痩せ衰えた小さいホビットが鉄格子の前によろよろと出てきた。「あんたたち、やつらの仲間じゃないな。」　いら立たしげな声でその男はいった。「わかるぜ、うん。おれ、アップルドア。ノブ・アップルドアだ。粥村の街道沿いで採掘器材を売ってた。ファーニーの奴が、最高の品物をここに持ってけっていったんだ。やつらが大金を払うだろうってね。」　男は突然笑い出し、それから、苦しそうに咳込むと、腐ったワラの中に黒いものをぺっと吐き出した。「ファーニーの奴に会うまで、おれは死なんぞ。」　男は歯をきっと食い縛って、息をついてから、大きな目で鉄格子越しにきみたちをにらみつけた。

「あんたたち、秘密を探りに来たのかい?　オーク鬼のやつらが洞窟で秘密のものを掘ってるぜ。おれも大きな穴を掘らされてたんだが、病気になっちまってね。今じゃ、オーク鬼だけで掘ってる。そこには、えらく力のあるものが埋まってんだ。オーク鬼のやつらでさえ、それが感じられるのさ。

「だけど、グリムボシュの黒表紙本に出てるやり方よりは、穴掘りの方がまだましさ。仲間のうち4人がそれでやってね。長いこと、ものすごい大声で叫んでたよ。グリムボシュがここにやって来ると、おれを見てせせら笑い、近いうちにおれを使って何か特別なことをするのを思いついたっていったんだ。『闇のもの』が現われるのはもうすぐで、最後の仕上げにおれが必要なんだとさ。」　ぶるぶる身を震わせながら、ノブは鉄格子を握りしめ、ほとんど聞き取れないような泣き声でいった。「なあ、あんたたち、まさかおれをここに置き去りにはしないだろ?」



## 72.

「これは、あらゆる危険の中でも、最も恐ろしい危険です。」とガラドリエルがいった。「エルベレスが汝たちを守ってくれましょう!　わらわは汝たちの手助けとなる知識を持っています。このことはよく覚えています。サウロンは、この世界において唯一の力ある者でもなく、最も偉大なる者でもありません。」

「全ヴァラールの中で、最も優れた狩猟の腕を持つのはオロメでした。オロメの角笛がミドル・アースに長い間鳴り響き、かれの猟犬たちはあらゆる悪の生き物たちに恐れられていました。たやすく捕まらない者を罠に掛けるときはオロメを頼みとするがよい。」

「ミドル・アースの中を歩く生き物たちの中で、最も賢き者がドリアスのメリアンでした。汝たちを欺こうとしたり、汝や汝の仲間たちに魔法をかけようとする者に立ち向かうときは、オロメの叡知を頼みとするがよい。」

「助言を求めたくば、北の道へ向かってロスゴベルへ行き、魔法使いラダガストの助けを求めなさい。ラダガストがそこにいれば、あなた方を助けてくれるでしょう。旅の途中で支えとなるよう、わらわの僕、エルフの行糧レンバスを差し上げます。いざという時、役に立ちます。」

「今は、別れの歌は歌いませぬ。というのも、またいつの日か、あなた方をカラス・ガラゾンにお迎えするでしょうから。」それが最後の言葉だった。　きみたちはロリエンを去り、影の中に向かって進んだ。

**73.**
むっとするようなパイプ草の臭いがかすかに漂っていた。「良質のパイプ草を探しているなら、シャーキー運送に何度もかけあってみな。かれらは、わしのパイプ草をピンからキリまで全部買い占めているんだ。今じゃ、粥村には長窪印は少しも残っとらんよ。」

**74.**
カウンターの上のメモにこう書かれていた。
「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、在庫が少しばかり不足致しております。本格的な冬入りとなる前に新たに仕入れるため、ぶよ水の沢地の北にあるわたしのキャンプへ出かけております。

敬具
ウィラ・ブルーム」

**75.**
ナウグリムの7父祖に対する7支族。

**76.**
ついに闇から抜け出たものの、それも慰めとはならなかった。気がつくと、邪悪な目の象徴で完備された暗い王座のある部屋に来ていた。暗い影がきみたちを覆い、呼吸が困難になってきた。ただ一つある窓から、灰で覆われた平原と、マグマと煙が吹き出している火山の恐ろしい光景が見えた。
「わしの指輪をよこせ！」　ぞっとするような鋭い声が聞こえ、きみたちは意識を失っていった…

**77.**
この巻物はガンダルフの書いたものに違いない。なぜなら、ガンダルフの書いた他のものと筆跡が一致しているからだ。この巻物には、かれがドル・グルデュアに潜入したときのこと、南にあるゴンドールの大都市、ミナス・ティリスの図書館で行った調査のことが書かれていた。「…黒表紙本の物語は実に恐ろしい。ある者は黒表紙本がアングマルの魔王のものだったといい、またある者は、ドル・グルデュアの死人占い師にしか書けないだろうといっている。ゴルサドの領主ガルデレグはこの本を徹底的に研究した。また、ガルデレグはデュリンの一族が去った後にモリアに群がったオーク鬼たちからモリアについて学び、黒表紙本にその詳細を加筆したといわれている。」

78.

気がつくと、きみは塚人の穴に囚われの身となっていた！　仲間たちは気を失っていたが、なだらかな高台に仰向きになっているため、かれらは王の死装束で着飾られた死人のように見えた。かれらの首にわたして置かれていたのは、長い抜き身の剣だった。突然まじないのような歌声がおこった。

「冷えよ、手と胸と骨、
冷えよ、石の下の眠り。
石のふしどに、もはや覚めるな、
日が絶え、月が死ぬ時まで。
黒い風に、星々も死ぬだろう。
その時もなお　ここの黄金の上に、
横たわっておれ。
死んだ海と枯れた陸を、
冥王がしろしめす時まで」

79.

床の塵が、何年もの間その部屋が誰にも掻き乱されていないことを証明していた。きみたちの足跡が初めてだった。「バーリンがここを封鎖して以来、この部屋に入るのはわれわれが初めてかもしれない。」　南側に、堅固な石を刻んで造ったトロウルの巨大な彫像が、苦虫をかみつぶしたような顔で部屋じゅうをにらみつけている。



80.

ほっと安堵のため息をついて、仲間の一人がトロウルの片耳の後ろにある古い鳥の巣を見つけた。生きているトロウルがそんな飾り物をつけているとは思われない。だったら、これらこそ、13人のドワーフと1人のホビットの正しい料理法で争ったがために、ガンダルフに捕らえられた3匹のトロウルにちがいない！今や、かれらは死んだ石以外の何者でもない。

81.

この大きな本は、関心のある項目をすぐに開けるようになっているらしい。「昔、カザド＝デュムのドワーフが所有していた珍しい細工物、アノールの金の舵輪は、悪の勢力に対してかなりの力をふるうといわれていた。一つの言い伝えがモリア崩壊の際に洩れ出した。ブルーインの息子ボリンが、舵輪を使って強大な悪の精霊をワナに掛けたというのだ。そしてボリンとその仲間たちは、精霊を葬ふり山脈から遠く離れた古森のはずれに葬ったという。」

82.

機械がガラガラ鳴って、ひどく不快な雑音を出し始めた。その蒸気はきみにガンダルフの花火を思い出させた。機械が動き出すと人々が目を覚ました。捕まる前に逃げたほうがいいと悟ったきみたちは、窓をこっそり這い出て、無事暗闇に逃げ込んだ。背後でたくさんの叫び声が起こり、何かが爆発したような巨大なエンジンの轟きにかき消された。

**83.**
客がいくぶん落ち着いているのを別にすれば、これがホビットと人間が称するところの酒場であろう。吟遊詩人のラスギルが昔の歌を奏でるのを、エルフたちが酒をちびりちびり飲みながら、注意深く耳を傾けている。

**84.**
きみが元村で探し求めているものを探せ。

**85.**
ここの明かりは思ったより暗い。もっと明るかったら、カウンターの後ろの掛け釘にぶら下がっている白い魔除けに気づいていただろう。

**86.**
通路が1マイルかそこら続き、たくさんの続き階段が下に降りている。少なくとも7つはあるだろう。一つの階段を降りたところを左に曲がり、廊下を歩いていくと、狭いドアを通って別の広間に出た。ここの空気はかなり暖かく、むしろ暑いくらいだ！

**87.**
はて、これはちょっと意外だ。鼻がほんの少し風雨にさらされて傷み、帽子は全盛時代も一度はあったもののようだが、これはまぎれもなく、老ガンダルフ自身に似せて造られた彫像だ。ずいぶん変な場所に彫像を置いたのものである。おそらく、トロウルの誰かがそれを気に入って、自分の家に持ち込もうとしたのだろう。あるいは、ここのほうがもっと目に触れるからであろうか？

**88.**
「誰もそれを知らないことになってるんだ。グリムボシュはそれを最もいいそうにない者までも殺した。大ボスはその話しを聞いたと思われるどっかの小さい人を探しに魔女を送った。おれが思うに、それはあいつらが穴の中で見つけたがっているものだと思うよ。ねえ、おれをどうしようっていうんだい？まさか、あんた達のような大旦那が、おれのような哀れな者を見殺しにする気じゃないだろうね？」

**89.**
至るところ黒く、すべてが闇だ。この場所には悪の気配は感じられない。ただ、大きなハンマーが繰り返し金床を打ちつける音が響いてくるだけだ。
　突然、暗闇から声が聞こえてきた。「われわれは死者だ。」明らかに、非常に力強く威厳あるドワーフの声だ。「長い間、われわれはカザド＝デュムの館を築くために努力した。われわれの腕は、骨を折って石を刻み、宝石を見つけ、館を築くために動いた。いま時は至り、敵がわれわれに戦いを挑んでいる。マハルの子らが最後の1人に至るまで死者の館へおもむくことになろうと、われわれは戦わねばならぬ。だが、ナウグリムの数はあまりにも少ない。」
　「お前たちはデュリンの領地に入り込んで、デュリンの宝物を使った。よってお前たちはデュリンの仕事をし、デュリンの家にふたたびデュリンの子らを迎え入れられるようにしなければならない。」
　突然、きみたちはどこか他の場所に移された。

**90.**
彫像が砕けて、塵と数個の奇妙な7つの側面を持つ石のかたまりになった。今や通路は開かれた。

**91.**
「わしがまだ冒険好きの若者だった時分に、古い風見ガ丘の頂上にある廃墟でこの奇妙な岩を見つけた。今では穏やかな眠りについているかもしれん老治療者ラッシュドックが、これはこの辺に住まっていた王の時代に由来する魔法のかけらだと教えてくれた。あんた方の旅に役立つかもしれん。」

**92.**
エレストルのほっそりした手が小さな円を形作った。「金の舵輪は、」と澄みきった声で歌うように、かれはいった。「モリアの細工物だった。ドワーフたちは、それを使って最も深い穴の宝庫に鍵をかけたのだ。そこにはドワーフの秘宝が蓄えられていた。」

**93.**
「ホビット！」と、バタバー氏が叫んだ。「さあて、これで思い出すことはと？　で、お名前をバギンズとおっしゃえましたっけ？　バギンズ？　その名前で何か思い出さなきゃなんなかったんだけんど、このとおり、次から次へと前のことを忘れちまって。したども、考えるひまさえあれば、また思いつくべえ。ノブがお客様方のお部屋を用意します。居間には火がごぜえますし、すぐ食事の用意をさせますで。」
「おーい！　ノブ！」かれはどなった。「どこにいる、もじゃもじゃ足ののろまやーい？」それから、振り向いていった。「小馬がありなさるなら、ボブによく世話をさせますで。」

**94.**
ガンダルフの手紙は何枚にもわたって書かれており、何人も他の人に読まれた跡があった。
『金はすべて光るとは限らぬ、
放浪する者すべてが、迷う者ではない。
年ふるも、強きは枯れぬ、
深き根に、霜は届かぬ。
灰の中から火はよみがえり、
影から光がさしいずるだろう。
折れた刃は、新たに研がれ、
無冠の者が、また王となろう。」

四伸、バタバーがこの手紙を即刻送り届けてくれるように願っている。立派な男だが、頭の中の雑然たること、がらくた置き場に等しい。頼まれたことをいつも忘れてしまうのだ。もしこれを忘れたら、火焙りにしてくれるつもり。
さらば！
ガンダルフ

**95.**
この床には岩とガレキが散乱している。ここで岩以外の物を見つけようとしたら、掘り返すしかない。サムワイズは深々と溜め息をついた。「がれきん中でまた働いたら、体中が痛えですだ。だけど、おら、ちっとでもお天道様の光と冷てえ風に当たりてえと、こう思いましただ。」

**96.**
奇妙な7つの側面を持つ石のかたまりが数個、ほこりの上に転がっていた。好奇心をそそられる通路が南方へ手招きしている。

**97.**
ドアに鋲で留められたメモにこう書かれていた。「早急なご入り用があっていらしたことでしょうが、ご迷惑をかけてすみません。当店の薬草の備えが少々不足しております。本格的な冬入りの前に新たに仕入れたいと思いまして、ぶよ水の沢地の北にあるキャンプへ出かけております。

敬具
ティム・シスルウール」

**98.**
このフレトにはロスロリエンの蔵書が置いてある。保存されたマローン樹に優美な筆跡で、ミドル・アースの長い歴史におけるエルフと人間の勝利と悲劇が書かれていた。

**99.**
今や仲間の数はあまりにも少ない。魔王が指輪所持者をひっ捕らえてモルドールへ連れ去った。サウロンの勝ちだ。

**100.**
ガレキの中に巻物が埋もれていた。
　その巻物は年代を経てぼろぼろに破れているが、パズルのように組み立ててみると、かろうじて次のような内容が読み取れた。「わたしはモリアからオーク鬼どもが盗んだ以上の…を発見をした。オーク鬼どもは、古墳山に近いゴルサドと呼ばれる古代の地を再び開けた。われらの祖先が精巧に作り上げたアイテム、モリアの…は、オーク鬼やその主人たちの手で…ようだ。われらの財宝の多くはこの地にあるのかもしれない…
　「オーク鬼どもは、デュリンの全財宝の中で最もはかり知れない力のある金の舵輪を発見したといわれている。その用途は明らかではないが、ゴルサドの黒表紙本…言葉が記録されているといわれている。強大な悪をほのめかす汚らわしい名だ。
　「わたしはもっと多くの手掛かりを得るために、古墳山を調べてから粥村へ向かうつもりでいる。そこは野伏ですら近寄らない危険な場所だ。十分承知していることだが…
（署名）スゥーリ」

**101.**

拝啓、オルデナド殿。

新しい製粉所はうまくいっております。先日の荷でご承知の通り、若者たちは生産高を倍増することができました。作業の質もまもなく改善されるものと信じております。ただ、あなた様のご同輩たちが地元の者たちをおとなしくさせてくれていますが、かれらはそれを快く思っていません。次の支払いはいつでしょうか?

敬具
ホビット村、袋小路の主人
ロソ・サックビル＝バギンズ

**102.**

「次の8つの謎をとくと考えよ：　狼の乾いたどくろを魔法使いがじっと見ている。　一方で、オーク鬼がドワーフを殺し、死んだドワーフをじっと見ている。
自分の皿に盛られた人間をトロウルが食べ、　そして、鷹が空高く舞い上がる。」

**103.**

「小谷村で探し求めているものを探せ。」

**104.**

店の中は空っぽ同然で、棚には数個のアイテムが置かれている以外、ほとんどむきだしの状態だ。

**105.**

ドアの上に鋲で留められたメモにこう書かれていた。「早急なご入り用があっていらしたことでしょうが、ご迷惑をかけてすみません。当店の薬草の備えが少々不足しております。本格的な冬入りの前に新たに仕入れたいと思いまして、ぶよ水の沢地の奥地にあるキャンプへ出かけております。来週かそこらには、お目にかかれると思います。

敬具
ティム・シスルウール」

**106.**

このフレトの中で、柔らかい黒髪のエルフの娘が歌を歌いながら紡ぎ車で撚り糸を回していた。娘はきみたちに気づいて会釈をした。「お針子のティナリンといいます。」と娘がいった。「ここにすわって新しいものを編んでいたんです。このケープですけど、気に入ってくださるかしら?」

**107.**

ささやく声が聞こえた。「スローリのケルンから。西.南.東.南.東.北」

**108.**

エルロンドは、ずたずたに引き裂かれた最後のマントを投げ捨てた。「ナズグルのうち少なくとも8人がどうなったのか、あなた方は確認してくれた。しかし、もはやぐずぐずしてはいられない。敵の9人の乗手どもに対し、9人の徒歩の者を行かせよう。指輪所持者とその仲間とともに、ガンダルフが行くだろう。なぜといえば、これはかれ一代の大仕事となるだろうし、おそらく生涯のいさおしをしあげる花となるかもしれぬ。残りの隊員は、世界のその他の自由の民、すなわち、エルフ、ドワーフ、人間を代表する者たちとしよう。エルフを代表してレゴラス、ドワーフを代表してギムリを行かせよう。人間の代表としては、ゴンドールにあるミナス・ティリスの勇敢な男、ボロミアを同伴させよう。

「エルフの諸侯を同行させられないわけではないが、それでは敵の目を引きつけるだけだろう。これら勇敢なエルフたちをあなたの一行に加えるのはよくない。わたしはあなたの任務に最も役立つ者たちを選んだのだ。

「あなた方は、ここから南へ進んで赤角口を通り、ロスロリエンの森へ向かうがよい。わたしの一族の者たちにはできるかぎりの援助をするよう伝えてあるが、中には証拠となるものを求める者もいよう。わたしの一族に何か訊ねられたら、わたしの名前を答えるがよい。寒い気候の中であなた方の助けとなるよう、ガンダルフに強壮飲料のミルボールを与えよう。賢く使うがよい。最後になったが、あなたには言葉を一つ与えよう。いつ使ったらよいのかは、いずれわかる。それは『メロン』という言葉だ。」

**109.**

ねばねばする撚り糸でびっしり編んだ絹の帯紐が出口をふさいでいる。

**110.**

この床には岩とガレキが散乱している。ここで岩以外の何かを見つけるには、だれかが掘らねばならない…

**111.**

濃いほこりが静まって、ふたたび周囲が見えるようになった時、不思議な形をしたガレキのかたまりの中に、7つの側面を持つ石のかたまりが7個あるのに気づいた。そのかたまりのひとつひとつに、ドワーフ語のルーン文字が刻まれているが、仲間の中で最も博識な者でさえ、それらの意味を解読することはできなかった。

**112.**

「おや！　わたしに良い食料を見分ける目はないけれど、この見事なキノコは、マゴットじいさんが昔育てていた赤カサ茸と同じだ。高級な食べ物だよ。」といったのだが、仲間たちはきみの鑑定眼を信じてくれないようだ。

**113.**

ほこりと白かびの臭いで鼻にしわが寄ってしまう。壁際にずらりと並んでいるのは、背が高く幅も広い本棚だ。大昔の領主の館から持ち出して来たらしい。しかし、棚には本も巻物もほとんど入っていない。1番本が多い複数の棚には、「粥村の歴史」という細いラベルが付いている。その下には「粥村の料理」という棚があるが、本の数は少ない。「その他」とラベルの付いたほとんどからっぽの棚に比べ、ほんの少し多い程度だ。

**114.**
「やつはオーク鬼の指導者だ。力ある魔法使いで、お前たちをすっかり変えてしまう魔法を知っている！」　かれの声が陰謀的な囁き声に変わった。「われわれは皆、やつを憎んでいる。やつの邪悪な火を消すつもりなら、塚山の近くにある階段を使って、やつの住処へ行くのだ。やつのワナをくじくための正しい合言葉を使うことを忘れるな。」

**115.**
アモン・スールのカルドラニ王四世サドレッドは、悲嘆のあまり結婚式の前夜に命を断った。ほんの数日前に、サドレッドと結婚するために南方に向かっていた恋人のルサンナと侍女の全員が、道中でオーク鬼に襲われて殺されたのである。後年、王の地下納骨所に入った人々は、かすかなすすり泣きを聞き、愛する人を失い、また、愛する人と遠くはなれた痛みを感じたと話したことであろう。

**116.**
「フロドの旦那！」　サムが叫んだ。フロドはサムを振り返ったが、この友達に少しいらつくばかりだった。「サム、ぼくたちはどんな犠牲を払っても指輪をほろびの山に持っていかなくちゃならないんだ。」
「わかってますだ。フロドの旦那。二人で行きましょう。だけども、何か大事なことを忘れていますだ、それをいわなきゃならんですだ。」
「それは何かね、サム?」

**117.**
ビルボからの手紙にこう書いてあった。「古森に関してはブランデーバック家の人々に尋ねよ。」　きみは手紙の中から、それよりはるかに興味をそそられるレイシアンの歌、つまりベレンとルーシエンの物語を見つけ、書き留めた。世界がまだ新しかった頃にルーシエンがエスガルドゥインの川岸で踊ったこと、ミドル・アースの水の一部がいまだに彼女を忘れずにいることを、この歌は述べている。エルフがいまも住む場所にいくと、水はルーシエンを思い出すと沸き立ち、どんなに強力な敵でさえ、よく防いでくれるというのだ。

**118.**
このフレトは、木の枝に巧妙に隠されたロリエンの警戒区域の一つだ。明らかにロリエンの指導者の一人とみえる背の高い頑丈なエルフがきみたちを見て、ダグノスの息子ケレブリスだと名乗った。

**119.**
祭壇の上に、ぶ厚い革張りの表紙の大きな黒い本が載っていた。この本は開いたままになっているので、台座の基部にある足のせ台に上がれば、ホビットでも読めるだろう。しかし、明らかに邪悪な雰囲気に包まれている。

**120.**

ピピンは妙にその井戸にひきつけられた。他の仲間たちが部屋の中であわただしく動いている間に、かれはそっと井戸のふちに忍び寄って、中をのぞき込んだ。冷たい空気が見ることのできない深みから吹き上げてきて、自分の顔を打つように思った。

突然、衝動に駆られて、かれは落ちている石を手探りで拾い、井戸の中に落とした。何か音が聞こえてくるまで、かれは心臓が何度もどきどきと打つのを感じた。それからずっと下のほうで、まるで洞穴のような場所の深い水に石が落ちたような、ドボーンという音が聞こえた。その音は非常に遠くから、うつろな竪穴の中で大きくなり、繰り返されて響いた。

**121.**

ほこりの吹き払われた広い場所の床に、「デュリンの子らがため、鋭き目は道を示す。」という言葉が刻まれていた。

**122.**

きみたちが中に入ると、ハンマーの音が止んだ。灼熱の炉の光で汗をかいている邪悪な顔という顔が、きみたちを威嚇するようににらみつけた。と同時に、巨大なウルクたちがハンマーと火箸とふいごを手から落として、鍛えていた武器を取り上げた。

**123.**

指輪所持者は夢を見ていた。茶色の小鳥が大鷲の高巣に向かって飛んでいった。雷鳴の中を、鷲が円形の壁に囲まれた大きな塔へ飛んで行き、さっと飛び下りて白髪の男を運び去った。「！アングマールと唱えて石をばらばらにしろ！」と男が叫ぶ。

**124.**

昔のドワーフの石工たちは、真にその道の達人だった。かれらの技能の多くは確かに代々失われてきているが、バーリンの民は、秘密の扉を塞いで自然の石に見せるだけの技能を十分持ちあわせていた。その構造は非常に強固にできているため、最強の石工の道具を使わないかぎり、誰も通ることができない。

**125.**
きみの叫びに答え、塚の壁を通して伝わってくる歌声が聞こえた。

「トム・ボンバディルは、陽気なじいさん。
上着は派手な青、長靴は黄よ。
これまでだれにも、つかまったことなし。
そうとも、トムは、主人なのさ。
トムの歌は、何よりも強く、
トムの足は、だれより早い」

トム・ボンバディルが現れた。かれはまた歌い始めた。

「出ていけ、この塚人め！
日の光に、消え失せろ！
冷たい霧のようにしなびろ、
風のようにわめいて去れ、
山々のずっと向こうの
不毛の土地へ、いっちまえ、
二度とふたたびここへ来るな！
お前の塚を空にしていけ！
闇より暗く埋もれて、忘れられろ。
門の在所も、永遠に閉じろ、
この世がたちなおる時まで」



この歌がひびいたとたんに、悲鳴が一声、長々と尾を引いて、いずことも知れぬ遠くへ消え去って行き、そのあとはしんと静かになった。きみたちの体は解放された。

**126.**
このフレトは、木の枝に巧妙に隠されたロリエンの監視所の一つだ。明らかにロリエンの指揮官の一人とわかる、背の高い頑丈なエルフがきみたちを見て、セレゴンの息子マルキアだと名乗った。

**127.**
ぼろぼろの大きな本にこう書いてある。「暗黒のき裂モリア、ドワーフ語でいうところのカザド＝デュムは、霧ふり山脈の地下にあるドワーフの大都市だった。大きな階段が…」

**128.**
「それからもちろん、南方ゴンドールにあるヌメールの強大なる王エレンディルの剣、ナルシルの刃がある。ナルシルは、イシルデュアがサウロンの指から指輪をもぎ取ったとき4本に折れた。『イシルデュアの禍い』が見い出されたとき、剣は鍛え直されて一本の剣となる。実際、これは難しいことかもしれない。というのも、何世紀をも経るうちに、折れた刀身の破片や、翼の形をした鍔や、柄に刻まれた豪華な宝石などの他の小片が剣から失われてしまったのだ。アラゴルンがこの剣を持っている。」

129.
オークの大君主ガーシュが警戒の目できみたちをにらみつけた。デュリンの斧は、霧の広間の壇上に隠されている。強力な呪文、ウダンの炎を唱えて、その斧をそこにつなぎとめている呪文を解け。

130.
粥村に近い風見山地の最南端にある風見ガ丘には、かつてのアモン・スールの廃虚がある。魔王の軍隊に破壊された古代の要塞だ。廃虚の下には地下室と洞窟があるといわれているが、野伏でさえそれを見出せずにいる。

131.
「見てごらん！　最近ここに誰か来たのだ。」　馳夫がいった。「戦いの跡だ。地面のあちこちに焦げ跡がある…何だこれは?」　かれは身をかがめて、火を免れた平たい石に最近書かれたルーン文字を見つけた。「G」と、かれはささやいた。「ガンダルフ本人の署名だ。かれはごく最近ここに来て、身を守る必要が生じたのだろう。われわれにもっと言葉を残す時間があったらなあ。」

132.
古墳山の西に古森最後の面影が広がっているが、かつては西部の山脈から霧ふり山脈へと伸びていた。この暗い森は、善と悪の両方の数多くの霊魂の住処となっている。そこには、エルフたちからベン・アダールと呼ばれている、長老セリンが住んでいる。

133.
びんのたくさん入った棚が壁際にぎっしり並んでいた。驚いたことに、ほこりやクモの巣がまったくない。極上のぶどう酒の収穫年度は、ミドル・アースの一紀以上にまたがっている。千を越えるぶどう園から集められたものだ。オールド・ワイニアドといった銘柄を見ると、心は何リーグも離れたホビット庄に戻ってしまう。他のものは、今やミドル・アースでは知られていない言語で銘柄が記され、そのぶどうの木が根をおろしていた土地や最初に飲んだ人々すら思い起こさせない。古いとはいえ、傷んではいないようだ。

134.
「純粋な水で作られているように見える杖が、粥村の北東の廃墟の下にねむっていると伝えられている。その杖は、伝説のバルログほどの強力な火の精霊をもしのぐ、強大な力を持つといわれている。」

135.
そこに足を踏み入れたとたん、壁の上の文字が光りを放ち始め、まもなく静止して完全に読めるようになった。筆跡は明らかにガンダルフ本人のものだ。「これを見つけてくれることを願っている。わしは目下、悪者どもによって地下に追われている。ここでぐずぐずするな。やつらは暗闇が何よりも好きなのだ。エルベレスの名を覚えておくのじゃ。なぜなら、その名はやつらを支配する力を持っているからだ。やつらがやって来る。もっと遠くへ逃げねばならぬ――ガンダルフ」

136.
きみたちは木の都、カラス・ガラゾンの城門に入った。人の姿は見えないが、周囲からたくさんの歌声が聞こえてくる。遠くのほうから、まるでそぼ降る雨が木の葉の上に落ちるように、天井から歌声が降ってくるのが聞こえた。不思議な場所だ。

137.
エルロンドがいった。「友人方よ、これなるが指輪の所持者です。かれ以上に大きな危険をくぐり抜け、緊急な任務をたずさえて、この地に来た者はいまだかつてほとんどなかった。話されるべきことがたくさんあり、一つ残らず聞いておいたほうがいいでしょう。エルロンドの会議を始める。」

138.
この床に書かれているドワーフのルーン文字は解読不可能だ。

139.
ガーシュが哀れっぽい声でいった。「大きなトロウルの彫像にある言葉をいえ。イシルディンといえ。」

140.
きらきら輝く姿が呼びかけた。「アイ　ナ　ヴェドゥイ　デュナダン！　マエゴヴァンネン！」　その言葉と鈴の鳴るような澄んだ声を聞いて、きみたちの心にはもう何の疑念も残らなかった。かれはエルフ族の一人だ。この世界広しといえど、このように耳に美しく響く声の持ち主はエルフのほかにいない。
「こちらはグロールフィンデル、エルロンドの館に住んでおられる。」と馳夫がいった。



141.
その扉には鍵がかかっているようだ。

142.
そこに足を踏み入れたとたん、壁の上の文字が光りを放ち始め、まもなく静止して完全に読めるようになった。筆跡は明らかにガンダルフ本人のものだ。「これを見つけてくれることを願っている。わしは目下、悪者どもによって地下に追われている。わしの魔法がやつらを抑えておくだろうが、それも長くは続くまい。ここでぐずぐずするな。やつらは暗闇が何より好きなのだ。エルベレスの名を覚えておくのじゃ。なぜなら、その名はやつらを支配する力を持っているからだ。ささやかな助けとなる二つの新しい名前を授けよう。！ルーシエン　は水の上で役に立つ。！ミスランディア　は火の上で役に立つ。この二つの言葉を賢く使うのじゃ。やつらがやって来た。わしは再びアルダの光を見ぬ前に、もっと遠くへ逃げねばならぬ――ガンダルフより」

**143.**
一枚の細い石橋が､50フィートの長さをただ一つのカーブを描いて深い奈落にかけ渡されていた。火の向こうの西方に､黒いものの姿が何百人も怒り狂ってうようよと集まっていた。かれらは血のように赤く火に照り映える槍や三日月刀を振り回していた。太鼓の音は鳴り響き､その音はますます大きくなってきた――ドーン､ドーン…ドーン､ドーン！　矢がいくつもきみたちのところに落ちてきた。西のほうから､トロウルの黒い影たちが大きな石の板を何枚か橋代わりに火の上に渡した。しかし､指輪の仲間たちに波のように押し寄せる恐怖のおののきに逆らう間もなく…炎と影に包まれたバルログがやって来た。

**144.**
エルフ族の鈴の鳴るような澄んだ声で､グロールフィンデルが話しかけた。
「わたしは裂け谷からあなたを探しに遣わされた者だ。あなたが途中危難に遭われたかと気づかっていたところ。」
「それではガンダルフはもう裂け谷に着いたのでしょうか?」
「いや､わたしが出かける時にはまだだった。しかしそれも9日も前のこと。あなたがブランデーワイン川の向こうで出会ったギルドールとかれの部下たちが､あなたがこちらに向かっていることを伝えてくれた。
「橋の上にいたサウロンの僕どもを追い払ったとき､ミスエイセルの橋の上にエルフのしるしを置いてきたのはわたしだ。9人のしもべたちが前後に近づいているとなると､なお心配だ。黒の乗り手たちがあなた方の足取りを街道に見出したとなると､風のように馬を飛ばせてあとを追って来よう。」

**145.**
黒表紙本は魔法使いにとって強力な手段となるが､意思の弱いものは使うべきではない。さらに､その本には､ドワーフがカザド＝デュムと呼ぶところのモリアに関する恐ろしい秘密が書かれている。火がその禍いのもとである。

**146.**
この石のふたは堅固に閉ざされている。割れ目にてこを入れることさえ不可能だ。

**147.**

高潔だが、きみたちの知っているどんな悲しみよりも深い悲しみを帯びた幽霊がここをさまよっている。邪悪な気配は感じられないが、にもかかわらず、うつろな嘆き声がしたとき、ぞっとするような悪寒がきみたちの背筋を走った。

「わしは生前、この地を何世紀にも渡って支配してきたアモン・スールの数多い領主の一人、サドレッドという者だった。昔、わしは美しい少女ルサンナに心を捧げた。だが、二人の愛はついに結ばれることはなかった。というのも、魔王のしもべどもが彼女の魂を誰の手にも届かないところへ連れ去ってしまったからだ。愛！　それはアングマールのどんな矢よりもわしを打ちのめした。わしは配下の軍勢とともに塔の中にいた。「見る石」を通しても、わが領土とその向こうで起こっているすべてを見ることはできなかった。わしは王の富を所有していた。だが、そんなものは何の意味もなさなかった。わしはルサンナのために戦うことができず、石の中にルサンナを見ることができず、わしの富と権力をもってしても彼女を買い戻すことができなかった。

「今ではわしは死者の見張りをしている。死者に愛を知ることなどできぬというのに、わしの死んだ心はいまだに愛を知りたいと願っている。女に愛されているあかしを示さぬ限り、だれ1人としてここを通すわけには行かぬ。」

**148.**

ずいぶん高く登ってから、カラス・ガラゾンで最も大きなマローン樹の枝の真ん中にしつらえられた大きなホールに出た。樹身の下に置かれた二つの椅子には生きた枝を天蓋にして、ケレボルン王とガラドリエル王妃が並んですわっていた。



**149.**

「わたくしは、ゴンドールの執政デネソールの息子、ボロミアと申す者です。わたくしは、わたくしを悩ました夢の答えを探し求めて北方へまいったのです。その夢の中で、わたくしは、東の空が暗くなり、雷鳴が次第にその轟きを強めるように思いました。しかし、西の方にはおぼろな光が消えやらず残り、そこから声が聞こえてきました。それは遠くかすかな声でありながら、はっきり聞こえてきました。その声はこう叫んでいたのです。

折れたる剣を求めよ。
　そはイムラドリスにあり。
かしこにて助言を受くべし、
　モルグルの魔呪より強き。
かしこにて兆を見るべし、
　滅びの日近きにありてふ。
イシルデュアの禍いは更生し、
　小さき人ふるいたつべければ。

折れたる剣とは何でありましょうか？　誰が、何が、イシルデュアの禍いであったのでしょうか？」

**150.**
ゴルサドのガルデレグ王は、部下の戦士たちがカザド＝デュムの略奪から戻ってきたオーク鬼の群盗から取り上げたきらめく剣を、広い高原地にそびえる自分の塔の地下深くに隠した。

**151.**
トロウルの洞窟の砦の中にエルフの巻物が隠されていた。どうしてそれがここにあるのか、きみたちにはわからないし――知りたいとも思わなかった。巻物は風雨にさらされてぼろぼろになり、ほとんど判読不可能だった。唯一読めるのは、裂け谷に関するもので、次のように書かれていた。「極上のぶどう酒の向こうにイムラドリスの深淵がある。」

**152.**
ミドル・アースで最も強力な剣が、ダーク・エルフ　エオルの剣、アングラハェルである。その剣は、ノグロドのテルカールによって鍛えられたもので、ゴンドリンの滝の中に失われたと信じられていた。しかし、黒い刃は難を逃れ、モルゴスとの最後の戦いでヴァラールに味方したドワーフたちによって、戦利品としてモリアに持ち運ばれた。モリアでは、デュリンⅥ世の王子ナインがその剣を振るっていたが、それも、『デュリンの禍い』がドワーフたちをモリアから追放するまでのことだった。ドワーフたちはその剣をモリアの略奪から持ち去ったが、今どこにあるのかは誰も知らない。

**153.**
ひどくみすぼらしい生き物がうなるような声でいった。「灰色のドワーフたちにモリアといえ。」　きみたちは多大な犠牲を覚悟のうえで、約束通り、その生き物を暗闇の中に逃げ込ませた。

**154.**
きみのたいまつが、眠っている人物のそばの赤茶けた壁にぶら下がっている錆びたナイフを遠くにぼんやり映しだした。目ざとくなかったら、そこにあるのを見過ごしていただろう。

**155.**
これは古代エルフの生活必需品だ。といっても、その技量はまぎれもなくドワーフのもので、明らかにエルフの金銀細工師とモリアのドワーフの王たちがすばらしい（今では仲違いして久しいが）友情で結ばれていたエレギオンの時代に遡る代物だ。

**156.**
川岸の泥で人間に似せて作られた彫像が、王座に腰掛けている。この像は、力ある枝垂川の精だ。彼女はゆっくりと深みのある声でいった。「わらわは、そなたらのことも、そなたらの使命のことも存じております。だが、わが秘密の場所からスイレンの花を取れと誰が命じたのですか?　納得できるしるしを見せなさい。」

**157.**
「透明な氷で作られているように見える杖が、古森の洞窟に失われていると伝えられている。その杖は、伝説のバルログほどの強力な火の精霊に対抗する値打ちがあるといわれている。」

**158.**
「なるほど」スマウグが唇を舐めながら(或いは、まったくそれに相当するしぐさをしながら)いった。「竜の何たるかも考えずに、おれのような竜を矢のごときつまらんもので殺せると考えるなんて、お前たちはまったくの阿呆にちがいない。おや、嗅ぎ慣れた臭いがする。おれのカップを盗んだやつの臭いに似てるぞ…ひょっとして、そいつの親戚かな?」

**159.**
幸福な時代には、エレギオンのエルフたちは優れた金銀細工師であり、多くの不思議な魔法のアイテムを製造していた。細工師たちの長がケレブリムボールだ。かれはサウロンの堕落に染まることなく、多くの力ある指輪を作った。こうした指輪の中に鍛冶師の指輪と呼ばれるものがあり、ケレブリムボール自身の技が少し吹き込まれていた。エレギオンが滅亡し、ケレブリムボールは死んだが、かれの技は指輪になお生き続けて、細工師から細工師へと受け継がれていった。ついには、その指輪は大疫病を逃れたデュネダインによって古森へ持ち込まれた。指輪の持ち主は枝垂川を渡るときにオークの矢を受けて亡くなり、以後、鍛冶師の指輪は二度と発見されることがなかった。



**160.**
一枚の細い石橋が、50フィートの長さをただ一つのカーブを描いて深い奈落にかけ渡されていた。西方の火の向こうに、黒いものの姿が何百人と怒り狂ってうようよと集まっていた。かれらは血のように赤く火に照り映える槍や三日月刀を振り回していた。太鼓の音が鳴り響き、その音はますます大きくなってきた——ドーン、ドーン…ドーン、ドーン! 矢がいくつもきみたちのところに落ちてきた。西のほうから、トロウルたちの黒い影が大きな石の板を何枚か橋代わりに火の上に渡した。だが、波のように押し寄せる恐怖のおののきに指輪の仲間たちが逆らう間もなく…炎と影に包まれたバルログがやって来た。
「逃げろ! これはあんたたちの一人としてかないっこない敵じゃ!」 ガンダルフが叫んだ。魔法使いのあらんかぎりの力を持ってしかこの敵には立ち向かえないだろう。おそらく。

**161.**
「あなたの荷は重いが、きょうここで行なわれた選択は正しかったと思う。」とエルロンドはいった。「だが、指輪の旅に出る前に、黒の乗り手たちの運命を知り、敵の企みをもっとよく知る必要がある。よって、最強の勇者たちを集めて偵察するのだ。かれらが死んだという証拠をわたしのもとに持ってきてもらいたい。この周囲の地で、あなたの旅に役立つ秘密や宝物が得られるだろうことも念頭に入れておくがよい。遠く、広く歩き回り、もう一度ここに戻ってくるのだ。」

**162.**
拝啓、オルデナド 殿

わたしどもに対して優しい態度をとるよう、あなたの若い人たちに伝えてください。結局、わしのせいではなく、かれらの落ち度によって、哀れにも機械は壊れてしまいました。かれらがもっと丁寧に仕事をしていれば、機械はまだ動いていたでしょうに。地元の者たちも少し思い上ってきております。秩序を守るため、ご同輩をあと数名送ってください。次の支払いはいつでしょうか?

敬具
ホビット村、袋小路の主人
ロソ・サックビル＝バギンズより

**163.**
ここにあるドワーフの彫像は、こんな大広間には場違いな感じがする。しかし、彫刻師の手で描かれた高潔で力強い風貌からは、自信と沈着を放っているような気がする。壁の上の石の壁画には、ドワーフの治療者から治療を受けている一人の負傷したドワーフが描かれていた。

**164.**
次の一節ではホビット庄に触れているようだ。「アルセダインのアルヴェレグ王の若いほうの王子アモナールは、バランデュイン川の西の地方を自分の領土として得たが、兄のアラフォール王の名のもとにこの領土を統治した。イシルデュアの子孫たちが傷つけ合った同族の争いと同じ過ちは繰り返さぬと誓ったのである。だが、二人の間の愛情は薄かったし、アモナールが誓いを立てた時はすでに手遅れで、何の役にも立たなかった。そして、最後の戦いで君主たる兄に非難されたアモナールは、無謀な行動に走り、近衛兵ともども魔王に殺されてしまった。かれは、アルノールの王に対して誓った忠誠は、永遠に不滅だと言い残して死んだ。そのなきがらは、自分の領地を見下ろす洞窟の中に葬られた。」

**165.**
ドアがバタンと閉まる音が、モリアの暗闇のホールに響き渡った。何かが引き裂かれて砕ける音が、重い石の向こうから鈍く聞こえてきた。その音は西の門に並んで立っていた大きな柊の木が根こぎされる音だった…美しい木々で、長いこと立っていただけに残念なことだ。その主が誰であろうが、その目的が何であろうが、いまや背後の道は水中の生き物によって閉ざされてしまったことを、ガラガラ崩れ落ちる石が物語っている。指輪の仲間の進む道はただ一つ、モリアの奥に通じる前の道だけだ。

**166.**
結局、奇妙な黒いカギとぼろぼろの巻物を見つけただけだった。巻物をほどくと、『デュリンの禍い』の二文字がちらっと見え、あっという間に巻物は粉々に砕け散った。

**167.**

緑色の蒸気が割れ目から吹き出して、部屋じゅうにもうもうと渦巻いた。冷ややかでうつろな声が響いてきた。「やっとまた、ご主人様のために思う存分働ける！」　ガスがきみたちを覆い、すべてが闇につつまれた…

**168.**

頑丈な体格をしているが、いらついたような顔つきのホビットが振り向いてきみたちをじっと見つめた。「気に入ったよ。おれの名前はブッシュドック、ネド・ブッシュドックだ。とにかく、おれが冒険を続けないとしても嫌がらないでもらいたいね。この人たちとライフがおれを行かせたがっていた場所に向いているのは、ホビットしかいないんだ。」

**169.**

ほの暗い明かりのついた地下室へ続く階段を降りたとき、影のような姿にぎょっとさせられた。だが、近づいてみると、精巧に作られただのドワーフの彫像だった。

**170.**

昔、カザド＝デュムのドワーフたちは、この部屋で鋼を作っていた。火はとうの昔に消え、唯一昔の面影を忍ばせるものとして、炉だけが残っている。きみたちは、すべてがこの場所にあるべき状態になっているのではないような気がした。炉にはドワーフのルーン文字が刻まれていた。

**171.**

古い骨と、空っぽの大びんと、壊れた器がこの薄暗い洞窟の床に散乱していた。「トロウル穴ってものがあるとしたら、これぞ極めつけ、正真正銘のトロウル穴だ！」と仲間の一人がいった。「外の道を作ったのが誰かわかったからには、ここから逃げ出すんだ。すぐ出たほうがいい！」
　だが、骨の間に何か埋もれている…

**172.**
冷気が一行を襲い、明かりがちらちらしたが、消えはしなかった。うつろな囁き声が、低いがはっきりと聞こえてきた。「ビルボの仲間の一人がここにいるような気がする。ビルボの高貴な家系の者かもしれん。」
「ほんとだぜ、オーリ。」別の声が加わった。「だが、おれたちとたっぷり話しをする前に、かれらに身をもって証明してもらわなくちゃ。」ここには目に見える生き物はいないし、幽霊すらいない。
「かれらが生きて通れなかったら、おれたちにとっちゃ何の役にも立たないってことだ。なあ、オイン。」と最初の声が答えた。
「フーーム！　だとしても、おれはかれらが影に仕えていない証拠が要るというね。」
「このごうじょっぱりめ！」
「おい、髭を剃れよ！」
冷気が消え去り、きみたちはお互いに視線を交わした。重苦しい暗闇で気が変になり始めているのは確かだ。
突然、また冷気が戻ってきた。
「『力の言葉が必要なのは当然だが、いくつかの言葉はきみたちにとって命以上の意味を持つ。だが、盗賊が助けたのは誰かというただ一つの言葉だけがわれわれにとって大きな意味を持つ』。」
「それは韻文じゃなかったよ！　ひどいへぼ詩を作ったもんだ。」
「しっ、まだ終わってないよ！　どこまでいったんだっけ。えーと…『だが、ただ一つの言葉だけがわれわれにとって大きな意味を持つ。盗賊が助けたのは誰か。ウーン…その言葉を暖炉の中に求めて、唱えよ。そうすればわれわれの悲しみは終わる』　そら、髭野郎、これで満足かい?」
「おい、ご主人様の気配だ。抜け出したのがばれる前にもどらなくちゃ。」再び冷気が消え去り、きみたちだけがモリアの石室の中にいた。

**173.**
きみたちの掘る音がホールじゅうに響きわたった。進むのは骨が折れるが、前進しているのは明らかだ。

**174.**
炉から煙が視界に立ち昇り、巨大なドワーフの幽霊が現れた。ドワーフたちがひざまづいた…これはまぎれもなく、全ドワーフの父、デュリンにちがいない！
「わしの斧を探せ！」かれが命じるようにいった。「それを使ってダーク・ロードを殺すのだ！」

**175.**
渦を巻いている淵の真中にある孤島に、かつては見事だった鷲の石像がひっそり立っていた。胴体から羽がもぎ取られ、目は泥におおわれていた。水流が速すぎて、泳ぐのは危険そうだ。

**176.**
ドアのうしろに隠された細い通路が1マイルかそこら続き、しまいには昇り階段となって、広い部屋に通じていた。

**177.**
ここにあるドワーフの彫像は、こんな大広間には場違いな感じがするし、しかも、石彫刻師の手で描かれた高潔で力強い風貌は、自信と沈着をかもし出しているように思える。浅浮き彫りの石の壁画には死んだドワーフのヒーローが描かれ、そして驚いたことに、治療者の手でかれの命が甦っているのだ。偉大なるは父祖の力かな！ たとえ、かれら自身の死を防ぎえなかったとしても。生き返りは、差し迫った必要が生じたときのみ、ヴァラールによって、かれらの時代の最も偉大なヒーローだけに与えられたのだった。ふたたび生命を与えられる者と同等の生贄が、しばしば必要とされた。

**178.**
障壁が壊れて石の破片が四方八方に飛び散り、暗い通路に通じる小さい入口が現れた。大きな石が一つ残され、次のようなメッセージが刻まれていた。「通る前に、ナウグリムの創設者について尋ねよ。」

**179.**
トムの妻、美しいゴールドベリがここにいる。彼女は病のため床に臥していた。傍らには、黒ずんだヤナギの葉が、ボウルの中で悪臭を放つ水に浮かんでいた。「わたしのスイレンの花…」と彼女が呟いた。「わたし用の池がこの家の南側にあります。どうか…スイレンの花を取ってきて。このしるしと、必要なものは何なりとこの家から持っていってください。」　彼女は、自分のしるしである、金の葉を樫の樹皮に張り付けたブローチをきみに差し出した。



**180.**
ドワーフの職人の彫像がここに立っている。片腕を宙に上げて、作業台の上に置かれた何かに熟練したひと打ちを運ぶ構えをしている。

**181.**
きみたちの足は、床に分厚く積もったほこりを舞い上げ、入口に散乱している初めは何か見分けがつかなかったものにつまづいた。部屋の真中にある石板は、何の変哲もない長方形の白い石で、ドワーフのルーン文字が深く刻まれていた。「墓のようだな。」と仲間の一人がいった。ほこりを払うと、『フンディンの息子バーリン　モリアの領主』と書かれていた。「では、かれは死んだのですね。」と別の仲間がいった。「そうではないかと心配していたのですが。」
　子細に調べると、その部屋の秘密が明らかにされた。「ここは昔、記録の間だった『マザルブルの間』だ。高いところに来すぎてしまった。われわれは7層目にいるのだ。」　東に、急な下り階段に続く狭い通路がある。周囲至るところに古代の戦闘の跡が残っている…折れた剣、まさかりの頭部、真二つになった盾や兜。昔ここで何があったにせよ、今や過去のこととなってしまった。

**182.**
きみたちは袋小路屋敷の書斎に入った。裂け谷のエルフの伝承に関する本が数冊と、ホビットの伝承に関する本がたくさんあった。ロソがビルボの大切な本をいじり回すと思うと胸が悪くなる。しかし、にきびっ面のロソが一度でもこれらの本に理解や興味を示すとは、どうも考えられない。

**183.**
この広大な広間の空気はとても熱い。その大広間には焼けつくような赤い光が照り映えていた。中央には高い柱が二列に並んでそそり立っていた。それらの柱は大樹の幹に似せて彫られており、その張り出した大枝は、石の透かし模様を形造って、天井を支えていた。二本の巨大な柱の根元に近く、大きな割れ目が口を開いていた。そこから炎がパチパチ音を立ててゆらめいている。きみたちは大広間の西の端に来ていた。うまいことに、追手との間を火がさえぎっている。

**184.**
世界がこれほどの寒さを経験するようになったのは、アングバンドの時代からではない。昔、邪悪な精霊が霧ふり山脈に入り込んで、この山並を自分の所有物と見なし、自分の斜面を歩く生き物をすべて憎んだ。時代を経るつれて、カラズラスの精はどんどん冷たくなって暖かいものすべてを憎むようになり、それを消滅させようと企んだ。そこでカラズラスの精は、春の暖かさの一部を一羽の鳥の姿に変えて捕らえ、氷の鳥カゴに閉じ込めたのだ。以来、山脈はカラズラスの強固な意思に従うようになり、その悪意はその力と同じくらいに増大した。この洞窟は、赤角の精霊、無情なるカラズラスの住処であり、そこには春の鳥が氷のかたまりの中に閉じ込められている。それに敢えて挑戦しようとする者は誰でも、すさまじい寒さにぞっとさせられるらしい。「ばかもの！」　氷の上を転がって吹きすさぶ雪のようなシューッという声がどなりつけた。「生意気にも厳寒の冬の力に挑戦するつもりか？」　大吹雪のようにヒューヒューいう声がどなりつけた。「お前たちはわしの斜面を登った。今度はわしの住処に入り込む気か？　死ね！」　氷の割れるようなどなり声が聞こえてきた。

**185.**
ここには悪の存在を示すものは何も見られないが、抵抗できない不安そのものが、ほとんど救いがたい恐怖となってきみたちを捕らえた。

**186.**
ザブンと音を立てて、指輪の仲間のメンバー全員が、下方に不気味に渦巻いている水面に落ちた。暗闇に襲われて意識が薄れていった。

**187.**
きみたちは最近戦闘が行われた場所に来ていた。たくさんのオーク鬼の死体が横たわっており、ここで戦ったエルフは全員倒されていた。が、一人だけ生きていた。
「オーク鬼たちは野営をしている…沼地で。」　そのエルフは無数の傷を負って死の間際にあった。助けようにも手の施しようがない。「やつらを殺すんだ…やつらがキャンプを張る前に。きみたちが今やらなければ…きみたちの旅は決して…を越えられない。」
そういうと、そのエルフは息を引き取った。

**188.**
木々に囲まれた草原にエルフの乙女がすわっていた。乙女はきみたちを見ても怖がらず、物悲しい表情も変えなかった。「わたしはこうして影の中にすわり、迫り来る大いなる影のことを考えていました。ロリエンは滅びます。影が勝ったのです。」

**189.**
「もし、わたしが指輪を狙っているのであれば、それを取ることだってできる——そら！」
　馳夫は立ち上がった。その姿は突然前にも増して背が高くなったように見えた。「わたしが本物の馳夫だよ。そしてわたしはアラソルンの子、アラゴルン。わたしは、命にかけてあなた方を助けることができる。助けて差し上げよう。」　そういうと、かれは旅で汚れたマントの脇に今まで人目に触れず持っていた剣を抜いた。刃は柄の上一尺ぐらいのところで折れ、柄の宝石はなくなり、翼を型どった直角のツバが一つ失われていた。「たいして役には立たぬな？　しかし、この剣を新たに鍛え直すときももう真近かに迫った。」
　「影から光がさしいずるだろう。
　　折れた刃は、新たに研がれ、
　　無冠の者がまた王となろう」

**190.**
グリムボシュの箱の底に巻物が一つ入っていた。きみはそれを注意深く読んだ。
「わしは、そなたのなわばりのさまざまな物事に興味を持っている。金の舵輪はそのあたりにあるようだ。ぜひとも手に入れねばならん。強力な武器なら何であれ、わが敵に対して役立つだろう。いうまでもなく、デュリンの斧は是が非でも探し出さねばならない。
　「そなたの報告にあった、環状の石組みから聞こえてくる声に関しては、わしも興味を持っている。円環の中に慎重にアイテムを投げ入れて、聞こえてくる声を書き留めよ。それがカザド＝デュムの広間へ至る手掛かりとなるやも知れぬ。わしが最後にその広間を訪れたのは、『デュリンの禍い』が到来する以前のことなのだ。
　「従順が肝要だ。敵をつくるな。その他のことは、＊彼女＊がやってくれている。耳をそばだて、間近に迫るまでそれに手を出すな。力を使うと9人の乗り手どもの注意を引きつけるかもしれない。かれらに会うのは何としても避けるように。
　「わしは、そなたらの現在までの働きに満足している。オルデナドには、つまらんことでわしを悩ましてくれるなと伝えておけ。なにしろ運送会社はわしにとって、計画全体から見たらほとんど取るに足らぬ、ささやかな楽しみに過ぎんのだから。」…S
　巻物は白い手の紋章で飾られていた。

**191.**
そのエルフは辛そうに身を起こして話し始めた。
「わたしは数週間前に、光輝く鳥が氷のカゴに閉じ込められている不思議な夢をみました。あたり一面氷だらけでした。その鳥は明らかに捕らえられていて、わたしの助けを必要としていました。」
かれはうめき声を上げてから、また続けた。「その夢が幾晩も続いたので、わたしはガラドリエル様に教えを求めました。ガラドリエル様はわたしを鏡のところへ連れていき、二人で赤角口の東部にある秘密の通路を見ました。氷でできた巨大な怪物が、夢で見た氷に閉じ込められている鳥と一緒に見えました。氷の怪物はその鳥から力を吸い取って、その力を山脈の冬の威力を増すのに使っているようでした。
「わたしはすかさず、この怪物と戦う使命を賜りたいとガラドリエル様にお願いしましたが、ロリエンのエルフはその怪物に勝てないよう定められているとおっしゃって、拒絶されました。それからはもうその夢を見ることはありませんでしたが、忘れることはできませんでした。それで、たった独りで赤角に向かいました。ところがそこでオーク鬼どもに攻撃されて傷を負い、ロリエンに戻ってきたのです。
「霧ふり山脈のオーク鬼たちが赤角口を封鎖すれば、裂け谷とロリエンは危機にさらされます。カラズラスの精――ガラドリエル様が怪物のことをそう呼ばれたのです――この精の力が増大すると、われわれ全員にモルゴスの寒気がもたらされてしまうのです。カラズラスの精を倒さねば。赤角口を解放しなければなりません。」

**192.**
きみたちの持っている明かりはぼんやりほの暗いのに、きらめく壁の無数の小面に反射して強まり、明るい陽光の中にいるような気がした。ミスリルだ！　はるか昔、モリアのドワーフたちがこの高価な金属を求めてここを掘った。そして、ここでかれらは『デュリンの禍い』をも目覚めさせてしまったのだ。

**193.**
オインの怪しげな声が囁いた。「ドウィリのケルンから。西、北、東、北、東、北」

**194.**
『その他』と記された部門にある「粥村のホビットの生活」という題の本に、次のような記述があった。粥村に近い風見山地の最南端にある風見ガ丘には、かつてのアモン・スールの廃虚がある。魔王の軍勢に破壊された古代の要塞だ。噂によると、廃墟の下には地下室と洞窟があったが、アングマールの魔王に封印されてしまったらしい。封印に使ったのと同じ呪文を再び用いる以外に、これを解く方法はないという。風見ガ丘の廃墟の洞窟に通じる入口が他にもあると言われているが、粥村に住む者でさえ、誰一人としてそれを見つけてはいない。風見ガ丘の目じるしとして有名なのが孤独の岩である。はるか昔の戦争で魔王に殺された者たちを讃える墓標として、魔王の手から生き残った者たちが置いたと信じられている。孤独の岩は、有名な予見者マルベスの予言で讃えられている。

　イシルデュアの禍いが目覚めしとき、
　その失われし所持者は夢を見、
　孤独の岩が揺れるだろう、
　折れたる翼を見出すために。
　打ち砕かれし剣は鍛え直され、
　デュネダインの望みとなる
　弱き者が冥王を打ち倒し
　禍いは滅ぼされるだろう

　脚注にぞんざいななぐり書きで、「マルベスの予言によくあることだが、言葉の意味を真に理解できる者はいない。」と書かれていた。



**195.**
6人のドワーフの戦士の彫像がここを見張っている。口を利けるかのように見えるが、そしたら、きみたちは何と答えるだろう？　にもかかわらず、きみは心の奥底に胸騒ぎを感じた。これらの精巧に作られた彫像には、単なる彫像以上の何かがある。それは、戦士たちの武器に付着している黒ずんだしみに何か関係があるのだろうか？

**196.**
茶色の鳥が羽を広げた。きみは一瞬、顔を見たような気がした。それはガンダルフのようでもあり、ガンダルフより少し若い顔のようでもあった。鳥が共通語で話し始めた。
　「まだエルフを見つけておらぬなら、夜に緑山丘陵へ通じる道で探せ。そしてエレベレスのことを訊ねよ。なぜなら、エルベレスという名には、あんたたちを守る力があるのじゃ。ルーシエンという言葉にも力があるが、エルフたちからルーシエンについて学ぶことはできまい。」
　「古森の道のりは長く、困難で危険だが、そこなら敵が追ってこんじゃろう。森の主人を探せ。差し迫ったときは、助けてくれと叫ぶがよい。」
　「ガンダルフ！」「ガンダルフ！」と叫んで、その鳥は飛び去っていった。

**197.**
うつろな声が怒って叫んだ時、まわりの空気が粉々に砕かれたような気がした！　何人かの黒い影が物陰からよろよろと出てきて、空気の温度がどんどん下がっていった。邪悪なものが煙のように宙に漂っている。冷酷にくすくす笑うような声が、死と暗闇と運命をささやいた。

**198.**
「アセルウィン！」ときみは叫び、語尾が部屋じゅうにこだました。だがそれも無駄だった。彼女は死んだ。「彼女の犠牲を無駄にするものか。」　きみは涙をこらえながらいった。

**199.**
巻物の日付は100年前のもので、次のように書かれていた。「ドル・グルデュアの要塞は、最も深い穴からてっぺんの塔まで、10層になっている。要塞の中にはオーク鬼や邪悪な魔法使いがたくさん住んでいるが、中でも一番恐ろしいのは死人占い師だ。これが再び新たな姿を与えられたモルドールのサウロンであることはまちがいない。わしは、白の会議に急襲するようしきりに勧めている。この事実を知れば、サルーマンも少しは態度を変えることだろう。」　巻物には、「G」という署名があった。ガンダルフのしるしに違いない。

**200.**
一人立っている人物が、古代デュリン一族の王、グローインだ。他はドワーフの戦士たちで、おそらくヒーローたちであろうが、顔に見覚えがない。きみは心の奥底に胸騒ぎを感じた。こんな精巧な作りの彫像には、思い出すべき以上の何かがある。それは、戦士たちの武器に付着している黒ずんだしみに何か関係があるのだろうか？

**201.**
灰色の霧が晴れて意識がはっきりした時、きみたちは円柱のある暗い部屋にいた。どうやってここに来たのかよくわからない。そればかりか、元いたところへ戻る道もよくわからない。一方、暗い通路があちこちから手招きしている。

**202.**
オインが怪しげな声で囁いた。「ブーリのケルンから。西.南.東.南.東.北.西」

**203.**
硝石の上塗りを施したこの地下室の壁に、ほこりの積もった空っぽの石棚がある。下部の彫り物から、この棺台がデュネダインの王子ペリサールのためにしつらえられたということがわかる。

**204.**
足を踏み入れたとたん、壁の上の文字が光を放ち始め、ついには、はっきりと読めるようになった。筆跡は明らかにガンダルフ本人のものだ。「これを見つけてくれることを願っている。わしは目下、悪者どもによって地下に追い込まれたところだ。わしの呪文がやつらを抑えておくだろうが、それも長くはもたぬだろう。ここでぐずぐずするな。やつらは暗闇が何より好きなのだ。エルベレスの名を忘れるな。なぜなら、この名にはやつらにまさる力があるからだ。そしてもう一つ、ささやかな援助として新しい名を授けよう。！　ルーシエンは、水の上で助けを呼び出す。この言葉を賢く使うべし。やつらがやって来た。わしはもっと深いところへ逃げねばならぬ。再びアルダの光を見るのは、その後だ。――ガンダルフより。」

**205.**
その年寄りは棚からアイテムを盗み取った。「はは！」　かれは笑いながらべちゃくちゃしゃべった。「お前にやったものを、わしの甥のノブに持ってってくれ。お前の贈り物はノブの思いつきだったにちげえねぇ。ほれ、お前はこれを取れ。」

**206.**
きみの一行の中には、かなりショックを受けた者もいた。かれらは遠巻きに、畏敬の念に打たれながら、ミスリル鉱石の驚異を見つめている。他のどんなものも、この偉大で感嘆すべき場所では取るに足らないもののように思える。

**207.**
泥とガレキを払いのけると、岩床に深く刻まれたルーン文字を読み取ることができた。簡潔な文字で次のように書かれていた。「！7つのしるしを用いれば、デュリンの斧を取り戻せるだろう！」

**208.**
狭い橋に潜んでいる黒ずんだものが、デュリンⅥ世を破滅に導いた『デュリンの禍い』だ。この生き物こそがドワーフをモリアから追い出し、以来、全ドワーフの記憶に絶えずつきまとってきたのだ。きみたちの運命は定められた。

**209.**
暗い大広間だ。中央には高い柱が二列に並んでそそり立っていた。それらの柱は大樹の幹に似せて彫られており、その張り出した大枝は、石の透かし模様を形造って、天井を支えていた。二本の巨大な柱の根元に近く、大きな割れ目が口を開いていた。そこから、煙が幾筋か、暗闇の中へゆらゆらと静かに立ち上っていた。

**210.**
この巨大な戸口には、白鳥の形に似せて作られた鍵穴があって、鍵穴のそばにはエルフ文字で『フィナルフィン』と書いてある。

**211.**
結局、ぼろぼろに砕けた骸骨が見つかっただけだった。巻物には二つの言葉が刻まれていた。『デュリンの禍い』と。その古い骨に手を触れたとたん、骨が粉々に砕け散った。

**212.**
ビルボははっとして椅子から立ち上がった！「どうしても書いておかねばならないことがあった…遅すぎなければいいのだが！」

**213.**
ハルディアは目隠しをはずした。「あなた方は、わが古い王国の中心部、ケリン・アムロスにおいでになった。ここには色褪せることのない緑の草地に絶えず冬の花々が咲き続けています。黄色いのはエラノール、色の薄いのはニフレディル。ガラドリエルのところへまいりましょう。」

**214.**
障壁が壊れて、石の破片が四方八方に飛び散り、暗い通路に通じる小さな入口が現れた。大きな石が一つ残され、次のようなメッセージが刻まれていた。「ドワーフの父祖の数を訊ねよ。」

**215.**
きみたちの掘る音がホールじゅうに響きわたった。ついに、最後の強い一撃で、ガレキの山のてっぺんに大男でも楽々とくぐれるような大きな穴が開いた。

**216.**
トム・ボンバディルはもうこれ以上いく気がなかった。粥村に着いたらバーリマン・バタバーという亭主の経営する、躍る小馬亭という古い宿屋を探すように、そうトムは教えてくれた。そして、ここからはきみたちだけで行くようにといった。「こわがらないで行きなさい。だけど油断するんじゃない！　陽気な心を失わず、幸運に出くわすように旅を続けなさい！」
　きみたちはトムに、せめてその宿屋まで同道して、もう一度一緒に飲んでほしいと頼んだが、かれは笑って断り、こういった。

「トムの国は、ここでおしまい。
　トムは、国境をこえていかない。
　トムには、守る家がある。
　ゴールドベリが待っている！」

　それからトムはみんなに背を向け、帽子をぽんと放り上げて、歌いながら夕闇の中に去って行った。

**217.**
昔、闇の森は大いなる緑森の名で知られていた。のちに、敵サウロンがその森の南端にドル・グルデュアの大きな塔を建てて、徐々にそこを堕落させていったため、邪悪な生き物の住む闇森として知られるようになった。かれの迷宮はサウロンの魔法に染められているため、かれがいない時であっても、捕らわれている者たちはかれの存在に苦しめられるようになっている。
　ごく最近、次のようななぐり書きがあった。
「2匹の生き物だけが、秘密の入口を通ってドル・グルデュアに入り、出ていったといわれている。一人は、灰色のガンダルフで知られる魔法使いで、もう一人は、今やゴクリという名で知られるスメアゴルである。」

**218.**
ゆらゆら揺れる影の中に、大きな石の箱が隠されていた。その石にはルーン文字と複雑に織り交ぜられた模様が彫られていた。

**219.**
冷気が一行を襲い、明かりがちらちらしたが、消えはしなかった。うつろなささやき声が、低いがはっきりと聞こえてきた。「ビルボの仲間の一人がここにいるような気がする。ビルボの高貴な家系の者かもしれん。」

「ほんとだぜ、オーリ。」　別の声が加わった。「だが、おれたちとたっぷり話しをする前に、かれらに身をもって証明してもらわなくちゃ。」　ここには目に見える生き物はいないし、幽霊すらいない。

「かれらが生きて通れなかったら、おれたちにとっちゃ何の役にも立たないってことだ。なあ、オイン。」と最初の声が答えた。

「フーーム！　それでも、おれはかれらが影に仕えていない証拠が要るというね。」

「このごうじょっぱりめ！」

「おい、髭を剃れよ！」

冷気が消え去り、きみたちはお互いに視線を交わした。重苦しい暗闇で気が変になり始めているのは確かだ。

突然、また冷気が戻ってきた。

「『昼夜たゆまむことなくわれらの窮状を終わらせるよう努めん。第7層の中にその霊魂が眠る』　そら、髭野郎、これで満足かい?」

「おい、ご主人様の気配だ。抜け出したのがばれる前にもどらなくちゃ。」　再び冷気が消え去り、きみたちだけがモリアの石室の中にいた。



**220.**
結局、ぼろぼろに砕けた骸骨を見つけだけだった。巻物には、『モリア』の一文字が刻まれていた。その古い骨に手を触れたとたん、骨は粉々に砕け散った。

**221.**
きみたちはすばやくてすりを伝って低い層へはい降りた。

**222.**
「泥棒！」　突然どなり声が聞こえた。一対の石の翼以外、その部屋には何もないようにみえるが、その声は竜の声だった。「わしの宝庫に触れてみろ。永遠に呪ってやる！　それ以上近づいたら、この部屋をお前らの火葬用の薪山にしてくれる！」

**223.**
ここに立っているトロウルは、一族の中でもむしろ大きいほうだ。隆々とした筋肉がうろこ状の皮膚の下で波打ち、がっちりした片手には茶色の小鳥をつかんでいる。「ガンダルフ！　ガンダルフ！」　小鳥が叫んだ。巨大なトロウルは小鳥を汚いカバンに詰め込み、大きな戦闘用のこん棒に手を伸ばす。そのとき鳥が、「ガンダルフ、それはわたしが…」といったような気がしたが、その言葉はカバンのふたにさえぎられてしまった。こん棒をバトンのようにくるくる回しながら、怪物は前進してくる。喉をゴロゴロ鳴らしているが、きっと本人はくすくす笑っているつもりなのだろう。

**224.**
なんて奇妙なんだろう。この穴の側面はいつ崩れてもおかしくない感じで、よじ登るのは危険なはずなのに、君はそうとは感じられない。明るい輝きを発しているのが何か、きみには分かった。見たこともないほど大きく美しい宝石だ。それは青いサファイヤで、真中に黄金の鷲の像が見えた。
「北方の鷲たちは、我々の敵、竜のスマウグを殺すのを手伝ってくれたビルボに礼を述べる機会がなかった。」という声が宝石から聞こえてきた。「そこで我々は、ビルボの一族、ホビットたちにこれを贈ることにした。ミドル・アースの運命はホビットにかかっているのだ。差し迫った必要があるときはいつでもあなた方を助けに参じよう。だが、緊急の場合だけだ。ビルボの一族のうち一人だけが、我々を呼び出すことができる。これが、我々からホビットたちへの贈り物だ。きみたちが、マンウェの目である鷲の宝石を使う必要に迫られない事を祈る。」

**225.**
その本にはバーリンの一族の恐ろしい最後の瞬間が書かれていた。オインは水中の監視者に捕らわれ、ローニと他の者たちは東の門に行こうとして討ち死にした。「われら出ずること能わず！」　記録者は嘆いている。「今際の時来る。太鼓の音、深きより太鼓の音。今やかれら至れり！」　あとはもう何も書いていない。

**226.**
遠くから、ののしり声が聞こえた――それは黒の乗り手で、以前きみたちに無礼をはたらいた男と口論していた。黒の乗手が剣を振り上げ、すさまじい死の叫び声は聞くだけでもぞっとする。さいわい、黒の乗手は馬に乗って行ってしまったが、そいつがどこに潜んでいるか誰が知ろう？

**227.**

ホビットの大きさの人物が王座にすわって、嘲笑の笑みを浮かべてきみたちを見た。フロドだ！　だが、きみたちの知っているフロドじゃない。かれは、モルドールのダーク・ロードの権力下の影、すなわち生霊になっていた。

「ようこそ、わが友よ。そんなに驚いた顔で見ないでくれよ。わたしは今では何もかも知っているんだ。真実をね。ガンダルフはわたしたち全員を騙していたんだ。かれはビルボを嫌っていた。わたしもホビット庄も嫌っていた。指輪だけがバギンズ家を好いてくれた。しかも、その指輪はサウロンが作ったのだ。サウロンだけがホビット庄を好いてくれる。かれは、わたしたち全員を助けるために指輪を作ったのだ。そもそも、指輪はかれから盗まれるべきではなかったんだ。たとえ、エルフたちがその指輪をサウロンのものと認めようが、破壊しようなどとせずに、盗まれたものを返すのがわたしたちホビットの義務なんだ。ガンダルフは指輪を破壊したがっていた。ガンダルフこそ、悪魔なのだ。ダーク・ロードじゃなくてね。」

愚かにもきみたちは、サウロンの目的から旧友を思い止まらせようとした。「モルドールの敵は死ね！」　生霊のフロドはそう叫ぶと、きみたちに襲いかかった。

**228.**

マローン樹は驚くほど登りやすく、枝は強く頑丈だった。きみはその区域を注意深く見渡しながら、カラス・ガラゾンの住人たちが木の間に家を造ったのも不思議ではないと思った。



**229.**

長く激しい試合だった。ついに、きみは相手を地面に倒して、その両肩をねじ伏せた。

ベレグカムがにっこり笑った。「きみは実に強い！　こんな試合は久し振りだよ。生きているかぎり、その強さを持ち続けんことを祈る。」

**230.**

顔立ちの整った、長身の若いエルフが地面で寝ていた。きみたちが近づくと、かれは目を覚ましてにっこり笑った。

「旅の仲間のみなさんですね！　ちょうど今、わたしはとても奇妙な夢をみました。夢の中で、東の方がだんだん暗くなって完全な闇となり、その闇が広がって、ロリエンを覆ってしまったのです。すべてが失われてしまったように思いましたが、突然一筋の光が西の方から現れて、あなた方がすぐにやって来ると教えてくれました。その光が、あなた方に伝える謎をわたしに託したのです。もっとわたしと話をしませんか。そうしたら、その謎を教えましょう。」

**231.**

こっちに近づいて来る生き物は、古代の大悪霊バルログだ。上古の世にかれらは、ダーク・ロード、モルゴスに堕落させられて悪のしもべとなった。モルゴスはかれらを獰猛な戦士に変えて、強大な力を与えたのだ。己の杖から能力を完全に引き出した魔法使いだけが、この怪物を打ち倒せるだろう。魔法使いか、より強大な力を持つ遺物のどちらかだけが。

**232.**
仲間のドワーフは、ついさっき指輪の仲間に降りかかった不運も忘れ、石を見て興奮した。「この柱にはデュリンが最初に鏡の湖を覗き込んだ場所がしるされている。出かける前に、わたしたちも自分の姿を見ていこう。」

**233.**
ここはエルロンドの会議室だ。上座に椅子がたくさん置いてある。この広間は、エルロンドが極めて重要な問題を話し合うときに使われる。

**234.**
しきりにあごをさすりながら、エレストルはいった。「もちろん、強大なるエルフ王のギル＝ガラド自身が、裂け谷の幽の丘の頂上に埋めたといわれる、偉大な力を持つ武器『トロウル殺し』の噂は聞いているな。」

**235.**
周囲を見渡すと、西の方に巨大なマローン樹が見えた。きっと、あそこがガラドリエルとケレボルンの住まいにちがいない。東の方に大河アンデュインが見え、その向こうに暗く繁った森が見える。あれはたぶん闇の森だ。森の上を一つの黒雲がおおっている。あの下にダーク・ロードの北の砦、ドル・グルデュアがあるのだろう。

**236.**
「次はアラソルンの息子、アラゴルンの番であるはずだが。」とエルロンドがいった。「しかし残念ながら、かれはここに出席できなかった。『折れたる剣』とは、エレンディルの剣、ナルシルのことである。昔、敵との戦いでナルシルは折れ、その破片は失われてしまった。剣を鍛え直すため、破片を探し出さねばならない。
　『イシルデュアの禍い』とはサウロンの指輪、一つの指輪のことである。その指輪は、小さい人ビルボによって発見された。本日この場でビルボの手柄を讃えておこう。その指輪は、われらにとって重大な危険であり、そしておそらくは、唯一の希望でもあるのだ。それについては、ガンダルフから話してもらうことがたくさんある…」

**237.**
その本の話は汚れていないページに続いていた。「悪の手に渡らないよう、われわれはデュリンの強力な斧を誰にも見つからない場所に隠し、多くのワナと見張りで警護している。非常に巧みに隠してあるため、ガラドリエル王妃のしるしを使う以外、ふたたび発見されることはないだろう。われわれは、このしるしをデュリンの煙突に投げ込んでおく。」

**238.**
木わくに貼られたメモにこう書かれていた。「わたくしこと、ホビット庄のボス、ロソ・サックビル＝バギンズは、ホビット庄の改善拡張において、わたしに協力してくれる機械と大きな人たちの見返りとして、シャーキー運送にホビット庄で栽培される最良のパイプ草を永遠に提供することを、ここに同意するものである。

（署名）ロソ・サックビル＝バギンズ」

## 239.

この場所の床には、何年も前にこの塚の中で死んだ一人の男の骸骨が転がっていた。ぼろぼろの衣類が骸骨を覆っている。王子でも戦士でもないのは一目瞭然だ。墓荒らしだろうか？　もしそうなら、ひどい墓を選んでしまったものだ。かれが唯一獲得したのは一粒の宝石で、今なお固く握られた手の中に残っているが、生きて持ち出すことは叶わなかったのだ。

## 240.

巻物には100年前の日付で、次のように書かれていた。「ドル・グルデュアの要塞は警戒厳重だ。攻撃するなら奇襲以外にあり得ない。ドル・グルデュアの東には歩哨がいるので、こちらから襲うのは不可能だ…南にある森の迷路から行くしかない。迷路にはクモや怪物がうようよしている。（迷路は明らかに囚人を苦しめるために造られたものであるが、わしは迷路の東面にある彫像の広場の下に秘密の出口を作っておいた。この出口を通れば、歩哨たちの目を避けられる）」巻物には「G」という署名があった。ガンダルフのしるしにちがいない。

## 241.

「名を呼べば、最後の守護者が呼び出されるにちがいない…」

## 242.

巻物の日付は100年前のもので、次のように書かれていた。「ドル・グルデュアの要塞は、最も深い穴からてっぺんの塔まで、13層の高さになっている。要塞の中にはオーク鬼や邪悪な魔法使いがうじゃうじゃ住んでいるが、最も恐ろしい居住者が死人占い師で、再び新たな姿を与えられたアングマルの魔王であることはまちがいない。わしは、白の評議会に急襲するようしきりに勧めている。そうすれば、サルーマンはただでは済まないだろうことが期待できるからだ。」　巻物には、明らかにガンダルフのしるしである「G」が署名されていた。

## 243.

この滝は、レゴラスにとって特別な意味を持っていた。かれは、深く愛し合っていた二人のエルフ、ニムロデルとアムロスの物語を話して聞かせた。「ドワーフたちが山脈の地底で悪しきものを目覚めさせた時、多くのエルフたちがロスロリエンを捨てて去りました。そして、アムロスは南方のエルフの港で恋人のニムロデルが来るのを待っていましたが、彼女は白の山脈の山道で行方知れずとなり、とうとうやってきませんでした。しかしこの滝は今でもニムロデルのことを忘れずにいます。耳をよく澄まして聞けば、滝の音の中にニムロデルの歌声が聞こえてくるのです。」

## 244.

ナズグルが力尽きた。しかし完全に死んだわけではないようだ。単にこの姿を捨て去り、形のないまま、屈辱を感じながらモルドールへ帰ったのだろう。か細いが、ぞっとするような声が聞こえた。「サウロンの御代はまもなくやってくる！汝の死はすぐそこだ！」

**245.**
「わかったよ！」その男がわっと泣きだした。「きみたちは本当のことを知ってるんだね。あのかわいそうな、かわいそうな…」　かれは気を鎮めようとしたが、なかなかうまくいかない。数分経ってから、ようやく続きを話し始めた。「かれは、ノブ・アップルドアに何が起こったか調べていて、そしてあの場所へ行って、嗅ぎまわっていたんだ。それでやつらに殺されたんだ！　この目で見たんだ！　でも、誰にも言うな。みんな殺されてしまう！」

**246.**
きみたちは丘の周りを8周走って競争した。レゴラスやブラゴルヒアなど疲れを知らぬように見えるエルフたちでさえ、へとへとに疲れた。レゴラスが勝った…かろうじて。「ヴァラールが汝を祝福してくれますように。」

**247.**
エアレンディルの星とは、人間の勇者、片手のベレンが強大な敵モルゴスの鉄の冠から奪ったシルマリルの光である。シルマリルは、航海者エアレンディルによって西の国へ持ち運ばれ、かれはモルゴスとの戦いに援助してくれるようヴァラールに懇願した。ヴァラールはシルマリルを船の中に置いてこれを崇め、エアレンディルは船長に任命された。夜も更けて明け方になると、悪の没落を象徴するエアレンディルの星を見ることができる。その星の光りはあまりにも強いため、追放されていた時代においてもなお、エルフと人間との交友を保ち続けた水のヴァラ、ウルモに捧げられた魔法の池に映ることが時々ある。空っぽのうつわにその池の水を満たせば、その星の光りで照り輝くだろう。

**248.**
ガラドリエルがいった。「わらわの司令官のだれでも連れて行きなさい。ケレボルンの殿でもかまわぬ。急げば、裂け谷にもどる時間がありますから、エルロンドに援助を求めるがよい。また、偉大な力と危険を持つオプションも差し上げましょう…」
「この裂け目の西壁に入口があります。その入口を入ると、わらわが昔封鎖した地下の区域に出ます。その地下はモリアに続いていますが、『デュリンの禍い』が目覚めさせられると、他の悪しきものたちも目を覚まします。わらわはこの古代の入口を閉めざるをえなかったのです。
「洞窟の中はとても危険ですが、そこには叡知と力を備えたすばらしい宝物もあります。敢えてそれを望む者はなく、それを試みる力を持つ者はさらにいないのです。このような絶望的な時代にのみ、わらわはそのカギをだれかに差し上げるつもりです。そなたたちがこの危険を望むなら、それを持っていくがよい。うまくいけば、指輪の使命の助けとなる道を見い出すことができるであろう！」

**249.**
「ようこそ。わたしはリンウェンと申します。」　美しいエルフの声が迎えた。彼女はきみたちを振り向いていった。「わたしはすぐ出発します。そして影と敵から逃げるか、死ぬかのどちらかなのです。あなた方は何をそんなに心配しているのですか?」

250.
破損したページがたくさんあるが、一箇所だけ容易に読み取れる部分があった。「ナウグリムを創造したマハルによって、わたしは…」

251.
一人のエルフが獲物に向けて矢を放っていた。かれはきみたちを見て、こういった。「わたしはウアセルという者です。ミドル・アースのエルフの国の中心であるカラス・ガラゾンへようこそ。あなた方のお顔に幸運の星が輝きますように。」
ウアセルは思いやりのある親切な人で、きみたちは多くのことを語り合った。話題がかれの弓の腕に移ったとき、きみたちは獲物を仕留めたかれの腕を褒めたたえた。ウアセルはほめられて喜び、援助を提供することにした。
「あなた方は危険な任務を帯びていらっしゃいますね。わたしは一流の射手、超一流の弓の教師として通っています。もしお時間があれば、あなた方のうちお一人に弓の技を教えてさしあげましょう。」 ウアセルの申し出を受けるか?

252.
目の前に大きな黒い池が見える。その中央に、厚いローブを着た人間を型取ったみかげ石の彫像が3体立っている。まるで生きているようだ。顔のあたりに注意深く明かりを向けると、驚愕と恐怖の入り混じった表情が見えた。水そのものは静かで真っ黒だ。

253.
メモにこう書かれていた。「これはガラドリエルのしるしで、エルダールとナウグリムの友情の象徴である。このうち二つは、古代の戦いの時、サウロンから救い出してくれた王デュリンのために、ガラドリエルが作ったものである。その他のしるしはただひとつだけ、モリアにあることが知られている。このしるしは、デュリンの斧が敵の手に渡るのを阻止する保護手段の一つとして使われている。もう一つの保護手段は金の舵輪だ。この二つのアイテムを使わなければ、デュリンの斧は取り戻せない。」

254.
裂け目を越えて来る黒い影の正体を知って、きみはぞっとした。全エルフの悪夢から飛び出した姿こそ…モルゴスのバルログだ。ミドル・アースの第一紀における戦いで、エルフの勇者がいく人も、この悪魔のような生き物たちの手で殺された。フィンゴンもエクセリオンも、偉大なフェアノール自身も。ミドル・アースのエルフにふりかかる禍いの中で、バルログより危険なものといえばサウロンだけだ。きみたちの運命は定められた。

**255.**

ここがこの世に住むドワーフ一族の中心部、父祖の広間だ。驚いたことに、オーク鬼どもは、いつものやり方でこれらの地下室を損っていない。ここには、今まで見たこともないほどたくさんの石棺がある。石棺の上には、ドワーフの秘密言語で書かれた古代の碑文がぎっしり刻まれていた。

「これは墓じゃない。」 ギムリがきみたちの注意を一つの石碑に向けさせた。「火急の事態生ぜしとき、デュリンの道具が道を示すであろう…」と読んでから、かれはいった。「ああ、こんな石碑のことは知りませんし、意味もわかりません。カザド＝デュムの滅亡から今なお残っている伝説の中にも、このことは語られていないのです。これは明らかに障壁の一種ですが、しかし、その先は一体どこに?」

**256.**

おや、これはちょっと意外だ。鼻がすこし風雨にさらされて傷み、ローブは全盛時代を思い起こさせるものだが、まぎれもなく、魔法使いサルーマン自身に似せて作られたものだ。しかし、どうしてこんな妙な場所に彫像があるのだろう。目に触れる以上の何かがここにあるのだろうか?

**257.**

しわくちゃで、酒染みのついた上質紙の巻物のしわをていねいに伸ばしてみると、かすかに読み取れる筆跡が認められた。昨日の日付と一緒に、「オルサンク」という言葉が書いてあるが、両方とも線を引いて消されている。その下に書かれた「イセンガルド」という言葉が、そのページでひときわ目立っている。



**258.**

雄勁な筆跡で、次のように書かれていた。「ガラドリエルの威光はロスロリエンのはるか向こうの峠まで達している。カラズラスの精霊ですら、今ではガラドリエルの意思に屈服して、年じゅう安全な通路を許してい奥方の力を必要とするときは、その精霊にガラドリエルの名をいうだけでよい。」

**259.**

カザド＝デュムには宝物がたくさんある。その迷路のように複雑な層の中には、金銀や、今まで鍛えられた中でも最強の武器がある。おそらく、その富のほとんどはオーク鬼どもに略奪されただろうが、やつらが狡猾なドワーフたちの隠し場所をすべて発見したとは思えない。

# 指輪物語

第一巻 旅の仲間

STARCRAFT 株式会社スタークラフト
〒355 埼玉県比企郡滑川町羽尾359
森林公園駅前　Tel.0493-56-3988

Interplay™